

# 人と水の古代史

— メキシコ、トルカ盆地の考古学 —

杉浦 洋子 \*

三千年を超える歴史を持つトルカ盆地の東部には三湖沼が位置し、それらはレルマ川によって繋がれている。この地域における1977年から現在に至る継続的調査は、湖沼の環境と人が、長い歴史を通して深い関わりを持って来たこと、トルカ盆地の住民のアイデンティティーの基盤となっていることを示している。同時にトルカの社会は隣接するメキシコ盆地から深い影響を受けて来た。特に古典期については、テオティワカンの影響を除外してトルカの歴史過程を理解することは不可能である。この一大国家が担う政治・経済マクロ組織の一部として、大国の庇護を受け、共生関係を築くことによって、トルカ地域の発展は可能になった。また、テオティワカンの崩壊後も、トルカ社会は栄え、続古典期にはコトラテルコ式土器の出現し新たな文化が開花した。

こうした背景を考慮に入れ、本稿はトルカ盆地の歴史的特殊性とも言える人と水の関係にアプローチする。事例研究として、三湖沼の最南端に位置するチグナワバン湖沼内に位置するサンタ・クルス・アティサパン遺跡を対象とする。そこで古典期後期より続古典期終末まで、数々の居住地を築き上げ浅湖という特殊な生態環境に適した生業形態を営んでいたボルドの住民（島民）の日常生活に焦点を当てる。

ボルドの住民は、古典期に地域センターに発展を遂げたサンタ・クルス・アティサパン遺跡の中核地へ、湖中の水産資源の供給をしていた。ボルドの人々は、経済的、社会的影響のみならず、文化、精神面でもテオティワカンの強い影響を受けていたが、その後、独自の過程を経て、古典期末にはトルカの一員としてのアイデンティティーを構築した。

本稿は、500年近い年月を沼沢地という環境で、独自の水の社会、そして文化を築き上げた人々による日々の生活を、ジェニニ的視点から解釈する。この沼沢地に築かれた社会は、あらゆる面で周囲の環境の変化に適応すべく、様々な対処策を考案・実行したが、気候の変化に対応することが出来ず、続古典期末には、湖沼内の社会は放棄された。

## 目次

はじめに	後古典期のトルカ盆地
I トルカ盆地の表面採集調査とセトルメント・パターンの変遷	II チグナワバン湖での人と水の生活形態—ケーススタディとしてのサンタ・クルス・アティサパン
1. 先行研究の背景	1. ボルドの分布図
2. トルカ盆地の地域調査とセトルメント・パターンの時代的変遷	2. ボルドの住民
3. 形成期における村落社会の傾向	3. 建築様式と公共スペース
4. 古典期におけるテオティワカンとトルカ盆地の関係	4. 湖沼内の日常生活
5. テオティワカン崩壊後のトルカ盆地—続古典期	5. 食生活に見える日常生活
6. マトラツィンカ族の台頭とメシカの征服—	6. 精神生活（死者の祭り、生業用具の儀礼的価値）
	7. 地域内外との物々交換、情報交換関係
	おわりに

## KeyWords

メキシコ中央高原  
トルカ盆地  
水の社会  
テオティワカン  
古典期  
続古典期

# はじめに

日本で出版された古代メソアメリカ文明に関する書物は、テオティワカンやテノチティトランをはじめ重要な遺跡が位置するメキシコ中央高原に記述が集中している。確かに、マヤやオルメカ文化そしてオアハカ地方に関する書籍も出版されてはいるが、メキシコ中央高原の研究書に比べると出版数は下回っている。メキシコ中央高原と一口に言っても地理的に広く、メキシコ盆地を中心に東はプエブラ州、トラスカラ州、南はモレロス州、北はイダルゴ州、そして西はメキシコ州を含む。

メソアメリカ地域最初の大都市国家として数世紀に渡ってメキシコ中央高原の大部分を管轄下に入れ、強い影響を及ぼしたテオティワカン、そしてスペインに征服されるまで巨大な力を振るったメシカ族による帝国(アステカ王国、三都市同盟 Triple Alianza)の首都テノチティトランがメキシコ盆地に栄えた大都市であったことを知らない人はいないであろう。現在メキシコの首都が置かれているこの盆地では、テオティワカンが大都市としてあらゆる面で強い影響力を持つ前か

ら、社会組織の複雑化過程が明確に認められる。トラパコヤなどの地方センター、あるいは都市化への途上にあったクイクルコ、初期のテオティワカンを好例として、形成期のメキシコ盆地は急速な社会発展の途上であったのである。このような状況の中で、長年、考古学調査がメキシコ盆地に集中してきたのも当然とすべきであろう。

本稿で扱うトルカ盆地はメキシコ盆地の西に隣接し、国内最大と言われるレルマ=チャパラ=サンティアゴ(Lerma-Chapala-Santiago)盆地の南端に位置する(図1)。メキシコ盆地の周辺地域と比較して、20世紀に入ってもこの地域での考古学調査は限られている。カリストラワカ(García Payón 1936, 1979; García Payón *et al.* 1974; Smith 2011, 2015, 2017) およびテオテナンゴ(Piña Chán 1975)という主に古典期後半から後古典期に繁栄した2大遺跡を除いてほとんど調査は行われてこなかった。筆者は、1974年にテオテナンゴの250mほど北に位置する古典期後期のオホ・デ・アグア遺跡より出土した土器の分析を行い、それらがメソアメリカ最大の都市国家テオティワカンの影響を強く受けていたことに驚嘆した。テオティワカンのトルカ地域への影響を解明せずには同地域の歴史を理解できないことを痛感し、筆者は

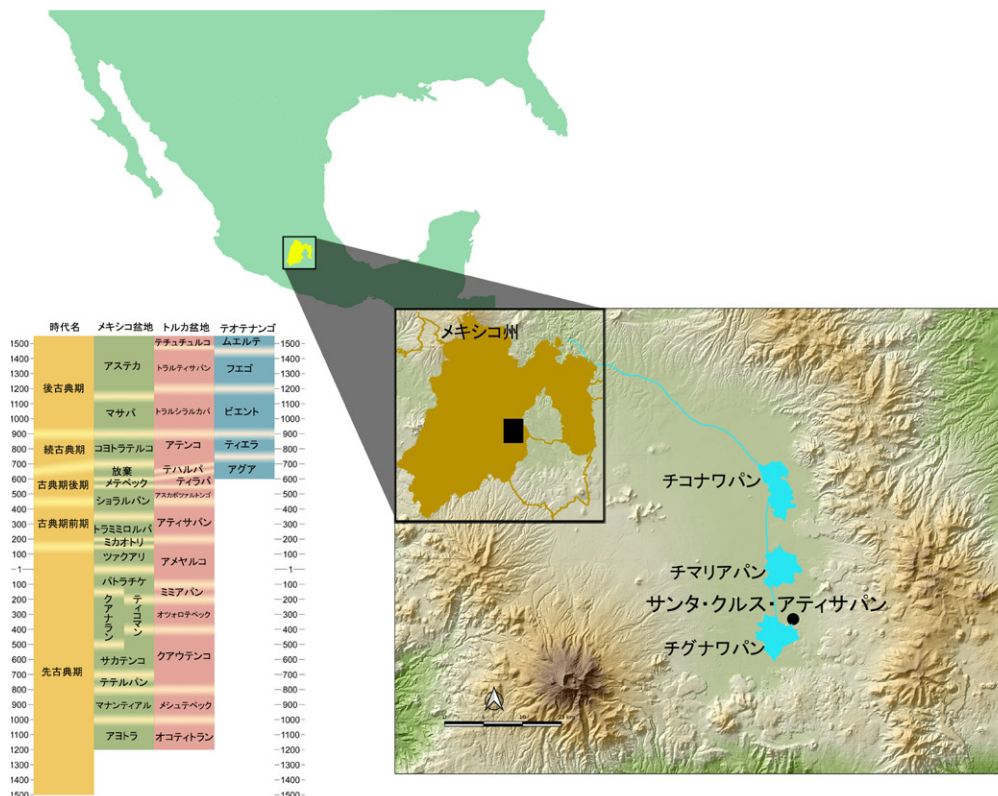


図1 メキシコ中央高原の古代史編年表(左)、トルカ盆地地図(右)

\* エル・コレヒオ・メヒケンセ

1977年にトルカ盆地考古学プロジェクトを始動した(Sugiura 1975, 1981)。

メキシコ中央高原の古典期の歴史は、テオティワカンを中心として考察されてきた。この大都市は政治・経済を基盤としたマクロシステムを確立し、古代メソアメリカ文明圏の大半に深い影響を与えた。その地政学的関係は、ウォーラーSTEIN (Wallerstein 1979) が提唱した世界システムモデルに類似すると言われてきた。最近、チェイス=ダンとホール (Chase-Dunn & Hall 1997, 2000) が、ウォーラーSTEIN のモデルを修正した資本主義以前の世界システムモデルを提案し、多くの考古学者の間に共感を生んでいる。現在でも多くの考古学者が、テオティワカン大都市国家の歴史をこうした視点から理解できると主張している。しかし、メソアメリカ最大の国家の形成過程は非常に複雑であるため、1つのモデルで理解するのは不可能であることも、多くの研究者の間の共通認識となっている。

世界システムモデルに基づいた研究は、テオティワカンの国家形成の理解において有効ではあるが、この大都市に研究が集中しているために、1つの弊害を生んでいる。それは、チェイス=ダンとホールが提唱する第一領域 (生活必需品共有圏) が中央を支える大役を果たしているにもかかわらず、この第一領域に相当するテオティワカンの後背地 (hinterland) の役割や社会の変化が、全くとっていいほどに解明されていない点である。社会の変化に単純明解なプロセスは存在しない。包括的視点からのアプローチが必要である。本論文で扱うトルカ盆地もその例外ではない。この地域がテオティワカンの発展と深い繋がりがあった事は、古典期の歴史を分析すれば明らかである。緊密でありまた特殊な関係を持っていたこの隣接する2地域の歴史を理解するには、世界システムのような構造的モデルより、今から60年ほど前にウイリアム・サンダース (Sanders 1956) によって提案された共生関係 (symbiotic relationship) という観点が必要で、より有効であると考えられる。確かに共生関係論に対する反論や疑問も認められる。しかし、テオティワカンとトルカ盆地の歴史の流れを両者の共生関係として捉え、オーガニックな非構造的進展や変遷をしつつもその関係は保たれたと考察することは意義あることだと考える。

トルカ盆地の歴史を理解するためには、まずセトルメント・パターンの変化的変化を分析することが必要である。70年代より現在に至るまで40数年に渡って継続的に、異なった角度からやってきたトルカ盆地の研究データは、この地域の人々が盆地の東に位置するアルト・レルマ湖と呼ばれる三湖沼と長い歴史を通じて深い関わりを保ってきたことを

示している。三湖沼は南から北へ向かって、チグナワパン、チマリアパン、チコナワパンと呼ばれ、レルマ川がこれらを繋いでいる。また、その過程でテオティワカンの影響が社会の全ての側面に現れることも考古学的物質文化が語っている。本稿ではケーススタディとして、チグナワパン湖周辺に栄えた社会に焦点を当てる。特にサンタ・クルス・アティサパン遺跡の出土品の分析結果を基に、この湖沼に居住していた人々の生活について考察する。古典期後期に起こった古気候の変化による水位の低下 (Caballero *et al.* 2002; Lozano *et al.* 2009; Lozano *et al.* 2005) のため、古典期後期 (後400/450~550/600年) から続古典期 (後550/600~900/1000年) にかけてチグナワパン湖の大部分は湿地・沼沢化した。サンタ・クルス・アティサパン遺跡はこの時期に栄えた。人々はおよそ100基以上の人工の居住地を構築し、浅い湖と盆地を囲む火山帯の自然景観と深い関わりを持ち、日常生活を送っていた。この湿地に居住した人々の日々がいかに複雑であったかを、ジアニニ (Giannini 2004) が提唱するルーティン (routine) とトランスグレション (transgression) という観点から考察する (Vergara 2011)。ジアニニは日常の実践生活 (vida cotidiana) を解釈的 (hermeneutics) 視点から説明する事を試みたチリの哲学者である。簡潔に言うともルーティンはその名が表すように、日々繰り返される動きである。この動きは行動である場合もあり、出来事である場合もある。常にある一定の「地点」から始まり、また同「地点」へ戻る動きである。同時に過去はルーティン存続の為に必須条件である。ある意味ではブルデューの「ハビトゥス (habitus)」と共通している面もある (Bourdieu 1977)。一方、ルーティンの行動は規則化されている事が常とされている。ルーティンを破る行動は、意識的であれ無意識的であれトランスグレションと同定される。トランスグレション的行動、出来事は常時認識される役割 (役目) から外される。日常見られる枠外の行動、つまりトランスグレションは、偶発的単発の枠外行動で終わってしまう事があるが、繰り返されるケースも多く、結果としてまたルーティンに変貌する事がある。

第I節では、トルカ盆地の歴史的特殊性と、筆者の40数年に及ぶ研究の過程について述べる。この長い研究過程を振り返るのは、本稿で考察する人と水の日常生活を論じる上で必要不可欠だからである。そして、第II節では、トルカ盆地の歴史的身份の基盤ともなった人と湖沼環境の関わり合い、特に日常生活について、サンタ・クルス・アティサパン遺跡をケーススタディとしてジアニニ的な視点からアプローチする。



# I トルカ盆地の表面 採集調査とセトル メント・パターン の変遷

メキシコ中央高原の他の地域と異なり、メキシコ国内で標高の一番高いトルカ盆地では質の悪い黒曜石以外特別な鉱物は産出しない。しかし、この地方の肥沃な堆積平野では豊富な農作物が産み出され、森林から木材が入手でき、季節に応じて様々な動植物が採集、狩猟される。特にトルケニヤと呼ばれる良質のトウモロコシの生産性は高かった。15世紀後半この地方がメシカ帝国（アステカ王国）に征服されると、トルカー帯は穀倉地帯として知られるようになり、テノチティランのトラテロルコ市場に送られる物資の3割はこの地方からの貢税であったと言われている。また、周囲を火山で囲まれた閉鎖流域（cuenca cerrada）であるメキシコ盆地とは異なり、この地域はレルマ川の水源であり、開放流域（cuenca abierta）を形成している。透明な水が流れる美しい川として昔から住民の間で知られるレルマ川は、トルカ盆地を南北に緩やかに縦断し、隣接するイストラワカ盆地へと流れている。レルマ川は古代から数少ない水路として大量の物資や人の移動に重要な役割を果たしてきた。車輪や大型の家畜が存在しなかった古代メキシコの社会において、その重要性は格別であったことは言うまでもない。また、レルマ川はメソアメリカ西部からの物資の流通にも大きな役割を果たした。

当地はメキシコにおける12番目の流域（núm. 12, cuenca hidrológica）に対応し、またアナワク湖・火山地帯（región de lagos y volcanes de Anahuac）の一部としても知られている。盆地は西南に聳えるネバド・デ・トルカ火山（Arce *et al.* 2003; García-Palomo *et al.* 2002; Garcia-Palomo *et al.* 2000; Macías *et al.* 1997）をはじめ、年代の異なる火山帯に周辺を囲まれている。東部には通称アルト・レルマ湖とよばれる三湖沼が位置する。ネバド・デ・トルカ火山と共にトルカ盆地を象徴する湖である。常に水位が低いこのアルト・レルマ湖は、長期的な気候の変化ばかりか、雨期と乾期による降雨量の変化にも敏感に反応し、時には湖となり、時には沼湿地になる。人々は常にこの湖と密接な関係を保って生活し

てきた。前述した様に、数千年に及ぶトルカ盆地の歴史を解明するにはこうした人と水の繋がりを理解せずには不可能である。この依存関係は、人の生業、精神、思考システムを特徴づけ、政治、社会環境、景観の変化に対応しつつトルカ地域に住んできた人々の間で、世代から世代へと受け継がれていった。そして、独特の水の世界を創り上げると同時に、社会的・文化的なアイデンティティーの基盤ともなったのである。

人と水の関係は複雑で高度な社会環境・組織を必要とした。この依存関係こそトルカの歴史過程を考察する上で看過できない要素である。それを理解するには、多角的な観点から社会コンテキストを考察すべきであり、以下では、40数年に渡り、異なる観点から筆者が行ってきた研究調査の成果を提示する。

## 1. 先行研究の背景

メソアメリカ考古学では1960年代から70年代にかけてリジョナル・サーベイとして知られる地域調査が盛んに行なわれた。メキシコ中央高原、特にメキシコ盆地ではサンダースを主軸にこうしたプロジェクトが複数行われていた。一方で、70年に入りテオテナンゴの調査が開始されるまで、トルカ盆地では地域の編年さえ明確に設定されておらず、メキシコ中央高原内の考古学研究として振り返られることもなかった。こうした状況の下、筆者は70年代後半から4年かけてリジョナル・サーベイを実施した（Sugiura 1977）。まずトルカの歴史の全体像を把握するため、盆地全域約1400km<sup>2</sup>を踏査し表面採集を行った。次に、地域調査で得られた考古学資料を基に、この地域の編年を確立していった。また、セトルメント・パターンの通時的变化、そして社会の複雑化過程を把握することを目的とした。当時の北米考古学会では新進化主義論の援用が最盛期であり、セトルメント・パターンからマクロな視点で地域の歴史を考察する研究が多かった。同時に、実証主義的方法論を提唱したニューアーケオロジーは多くの賛同者を得ていたため、この立場から、考古学を進めて行くとする学者も多かった。トルカ盆地の地域調査もこうした隣接国の強い影響を受けたのは当然である。また、考古学資料の形成過程に関する論議も盛んに行われていた（Hirth 1978; Schiffer 1972）。もちろん、住居址を分析するに当たり、表面採集で得られる考古学資料に内在する種々の問題点も充分考慮した。さらには、メキシコ盆地やトゥーラ・イダルゴ地域などの隣接地域で既に行われていた地域調査の結果との比較を容易にする目的で、筆者は表面採集調査において記録する項目リスト（cédula）を作成した。

## 2. トルカ盆地の地域調査とセトルメント・パターンの時代的変遷

トルカの地域調査ではっきりしたことは、第1に、この地方の歴史は隣接するメキシコ盆地にほぼ相応する古さを持っていることである。第2に、トルカ盆地の東境とも言えるラス・クルセス火山帯を挟んでメキシコ盆地と常に緊密な関係を保ってきたことである。この相互の関係は他の周辺地域との繋がりとはいくらにも比較にならないほど強く、トルカの文化の形成と発展に深い影響を及ぼした。従って、メキシコ盆地の歴史を考慮せずには、トルカの社会変化を解明することは出来ないと言える。しかし、セトルメント・パターンのデータは、この地域の社会の複雑化過程の速度が、メキシコ盆地に比較して非常に遅かったことも明確に表している。そして、第3に、盆地の東部に位置する三湖沼とこれらを繋ぐレルマ川、そして盆地を囲む火山帯と複雑かつ深い関係を保ちつつ、トルカ地域の住民が3000年に及ぶ年月を過ごしてきたことである。

マンモス、マストドン、その他の大型哺乳動物(megafauna)がトルカ盆地の各地で発見されている事実から推測すると、非定住の狩猟採集民がこの地域に既に居住していた可能性はある。最古の住居址のデータは表面採集の資料によると紀元前1200年ほどであり、形成期前期(前1500~1200年)に遡る。初期の移住者は土器を使用し、定住生活を行っていた。血縁関係を基盤にしたと推測される家族単位の住居で構成される小規模な村落が点在していたと思われる。形成期中期(前1200~500年)に入ると徐々に集落数も増え、同時に規模も拡大していった。特に標高2700mの中腹傾斜地に住居址が比較的多いことが注目される。サンダースの意見に従うと、当時のメソアメリカの農耕技術を考えれば、トルカの様な高原地域では水はけの良い傾斜地に住居を構えた方が適している。しかし、地域全体を見るとメキシコ盆地の様な集落の複雑化過程への進展は見られない。歴史の流れはゆっくりであった。確かに、社会組織の複雑化を象徴する考古学資料は検出されていないが、水を敬う習慣、水に関わるコスモロジーならびに儀礼を象徴する精神文化が、形成期のトルカ盆地の住民の間で既に確立されていたことに留意すべきである。

## 3. 形成期における村落社会の傾向

形成期後期(前500/400年~後100年)は、メキシコ盆地でテオティワカンが頭角を現し大都市へと変容していく時

代である。メキシコ中央高原内での人の動きは激しく、モレロス州など周辺地域からテオティワカン方面への移動現象が顕著に現れる。トルカ盆地でも、それまでの傾向と逆行する様に、住居址の数は激減する。この現象の主な要因として、テオティワカンへの人口の流出が考えられる。オトミ系民族がメキシコ中央高原において最古の集団であったと言われ、当然テオティワカンの国家建設において中心的民族であったと考えられる。一方、トルカはメシカ帝国に征服されるまで、オトミ系の言語民族集団の地域であったという歴史的事実を考慮すると、テオティワカンへの人口移動現象は当然とも考えられる。

前述した様に土器様式および器形における類似性は、既に形成期からこの盆地の社会とメキシコ盆地との間に深い繋がりがあったことを示唆している。広く捉えれば、トルカ盆地の土器文化はメキシコ中央高原の土器圏に属する。白、赤、黒の彩文土器、スリップに刻線、あるいは刻文で文様が描かれている土器が目立つ。器形もメキシコ盆地および周辺地域における形成期の特徴を共有している。土偶は、他の地域と同様、日常生活と関係の深い表現を持つものが多いが、集団の発展を目的とし、大地のさらなる肥沃や穀物の豊穡を祈願した土偶も出土している。土偶は形成期社会の代表的な遺物として重要な資料である。

## 4. 古典期におけるテオティワカンとトルカ盆地の関係

古典期(後100~600/650年)はテオティワカンがメソアメリカの一大国家として確固たる地位を確立した時期であり、また本稿の主要課題とも関係があるので、詳細に述べる。トルカの住居址の数は再び増加の傾向を見せる。大都市テオティワカンからトルカ盆地へと逆移住(return-migration)する人々がその一因であったと推測される。時代が進むに伴い、この逆移住の傾向は高まる(図2)。トルカの様な重要穀

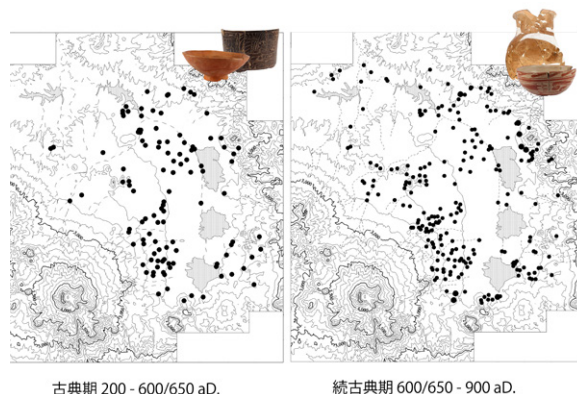


図2 トルカ盆地のセトルメント・パターン



倉地帯の確保は大都市にとって必要不可欠であり、トルカの人口の動態は、テオティワカンの統治者層による直接関与を示しているとも解釈できる。

一方、セトルメント・パターンにも変化がみられる。トルカ地域の住居址は古典期前期まで集落のレベルを超えなかった。しかし古典期中期(後200~400/450年)から古典期後期(後400/450~500/550年)にかけて、地方センター(regional center)とも定義づけられる遺跡が盆地の要所に現れ、脱平等社会へと進展していったことが考古学資料から実証されている。地方センターの規模は比較的小さいが、遺跡内にはピラミッド神殿の基壇、儀礼や祭祀行事が行われた広場など、一般の住居とは異なる公共的特徴を持つ建造物や空間が確認されている。古典期後期に入ると、既に設立されていたセンターは拡張され、また新たな地方センターが出現し、トルカ盆地のセトルメント・パターンは複雑化の一途を辿る。後述するサンタ・クルス・アティサパンもこの時期にトルカ盆地の東南に位置するセンターとして政治・経済力を拡張していった。このセンターの行政、経済、宗教の中核地はラ・カンパナ・テポソコと現在呼ばれ、そこで儀礼ならびに祭祀が行われ、チグナワパン湖の水産資源のみならず、ゲレロ州やモロス州原産物資の流通ルートがコントロールされ、物資はそこから再分配されていたと推測される。またここを中継地として、レルマ川の水路を利用してウカレオ／シナベクアロ原産の黒曜石を始め、ミチョアカン各地から交換物資がトルカ盆地内に供給されたようである。後期に入りテオティワカンの支配が一層強まり、オコヨアカク市のドランテス遺跡(Díaz 1998)などの重要な地方センターが、この大都市との最短距離に設けられ、その後テオティワカンの崩壊と共に姿を消した。また、肥沃な平野部の中央西に位置するサンタ・クルス・アスカボツァルトンゴ／エクス・アシエンダ・デ・ラ・モラ遺跡では、同時代の他の遺跡では確認されていない球技場で利用されたゴールが検出された。その他、テオティワカンでの出土品と酷似した遺物が出土した遺跡もある。遺跡の規模、立地条件、出土品の特徴などから、テオティワカンの直轄地あるいは衛星的役割を果たすセンターであったことが示唆されている。

後述する様に古典期、特に古典期後期にトルカの三湖沼周辺地帯および湖沼内、そしてレルマ川に沿って居住跡が増加した。こうした現象の最大の要因は気候の変化であった。結果、人と水の関係は以前に比べてより緊密になった。また、生計の糧となる豊かな水の資源、湖岸に湧き出る飲み水は、トルカ盆地の住民の日常生活にとって掛け替えのない役割を果たしていたようである。

またトルカ盆地と地方との交換網が、テオティワカンという一大国家が担う政治・経済マクロ組織の一部として急激に発展し、社会の複雑化を促進した。確かにテオティワカンが直接統治していた流通網の範囲とは比較にならないが、トルカもこの交換網システムを利用して、時にはテオティワカンを通し間接的に、時には直接的に、種々の物資を獲得した。肥沃なトルカ盆地は、テオティワカンの政治的・経済的マクロシステムの後背地として豊富な農産物、森林や水の資源を貢納し、テオティワカンという大都市を支える役割を担い、その重要度は時代を追ってますます高まった。一方、政治・経済面ばかりか、社会ならびに文化面でもテオティワカンの強い影響を受け、古典期中期になると社会のあらゆる側面でトルカ盆地はテオティワカン一色に染まることになる。その顕著な影響は、特に土器、石器、建築様式、埋葬などの物質文化に認められ、その物質性からテオティワカンの文化基準、伝統的スタイル、技術が推測される。またこれら物質文化を分析すると、いかにメソアメリカ最大のこの国家が周辺地域の精神文化に影響を与えていたかが明白瞭然である。テオティワカンの庇護を受け、共生関係を築くことによって、トルカ地域の進展は可能になったと言っても過言ではない。

古典期後期、テオティワカンに衰退の兆しが見え始める。その衰退過程は複雑であり、多くの考古学者が崩壊の原因について論じているが、都市の終末は検証できても、国家としてのテオティワカンの終局が解明されるのはまだ先のことであろう(Diehl & Berlo 1989; Manzanilla 2003)。テオティワカン・システムと呼ばれたマクロ組織は、数世紀に渡って、メソアメリカの大半の地域を何らかの形で支配する手段としての機能を果たしてきた。この政治・経済大組織に歪みが現れ、国家が弱体化した要因として、新たに台頭してきた地方国家がシステムの安定的な機能を妨げたこと、人口の膨張や大都市内に生じた種々の矛盾により問題が深刻化したこと、などがある。いずれにしても、テオティワカンは長い年月の末、徐々にその終末へと向かっていったのである。

大都市と共生することで繁栄してきたトルカ社会は、テオティワカン・システムが崩壊の兆しを見せ始めると、それまでの関係から脱却する傾向を強め、目を盆地内に向け、トルカ地域一帯の発展に注目する様になった。この過程を良く表しているのがアイデンティティーの高揚である(Jones 1996)。古典期後期のトルカ盆地の土器はこのプロセスをはっきりと表している(Sugiura *et al.* 2015)。特に器形、表面調整、焼成後の色合い、装飾の技術といった面で、テオティワカンの土器伝統を受け継ぎながらも、新たなアイデアが装飾のモチーフに加わり、さらには新旧の要素が併用され、一目でトルカ地

域の土器であると同定できる遺物が現れる。また、メシカ帝国（アステカ王国）により「神々の都」と呼ばれたテオティワカンの権力を象徴する薄手オレンジ色土器（Thin Orange）を模倣した、亜種型薄手オレンジ色土器（Pseudo Thin Orange）というトルカ独特の土器が多く出土している（図3）。この土器は、薄手オレンジ色土器と器形、表面の色調といった特徴を共有する。しかし、器形は浅鉢にはほぼ限られ、焼成後の表面の仕上げの粗さも独特である上に、中性子放射化分析（NAA）ならびに蛍光X線分析（XRF）によると盆地内で得られる粘土を使用しこの地域で作られていたことが確認されている（Sugiura & Jaimes 2019）。この様な土器群の微妙な変化は、テオティワカン崩壊期に急速な発展を遂げたアイデンティティー確立の重要なインストルメントであったが、古典期が終わると全て姿を消してしまう（Sugiura *et al.* 2015; Sugiura *et al.* 2013）。



図3 亜種型薄手オレンジ色土器の浅鉢

トルカ盆地で顕著に見られた前述の現象はこの地域に限られてはいなかった。大都市の衰退に比例するかのごとく、統治下にあった他の周辺地域も活発に動き始める。トルカ盆地では、住居址数（112 遺跡）が増加し、地方センターの規模も大きくなった。一方、物質文化面では、東はプエブラ州やオアハカ州のミステカ・バハ、南はモレロス州やゲレロ州、そして西はミチョアカン地域から、主に土器、メスカラ州およびプエブラ州原産の石彫、黒曜石などの交換物資が急激にトルカ盆地に搬入された。これらの物資は政治・経済面で当時の地方センターのエリート層だけではなく、社会一般の人々にとっても必要なモノである。また、祭典などの儀礼で用いられ、イデオロギーならびに宗教の象徴としての価値も持っていた。反面、テオティワカン国家の偉大さの表象といわれてきた薄手オレンジ色土器の出土量は、古典期を通じて非常に少ない。しかも、出土した土器は日常生活で使われる浅鉢がほとんどであり、テオティワカンで見られるような奢侈品ではな

い。古典期後期から末期（後 550~600 年）にかけての 200 年にも及ばない短期間に、周辺地域から入ってきた物資の量や種類は極めて多く、恐らくトルカの歴史上で前にも後にもこのような例はない。古典期を通して諸地域を結ぶ交流ネットワークは非常に複雑であった。メソアメリカのほとんどの地域を結んだマクロシステムを最上位に、中間距離地帯および近隣地域間との交換網など、スケール、機能の異なったネットワークが幾重にも折り重なって作用していたことがトルカの事例から解る。

確かに、古典期末期は激動の時代と言っても過言ではない。テオティワカンの成立がメソアメリカ全地域に影響を及ぼしたのと同様に、その終末もあらゆる面で当時の社会を動揺させた。続古典期（後 600~900/1000 年）に入っても、国家としては崩壊したテオティワカンは、アーバン・センターとしてメキシコ盆地で最大の都市人口を誇り続けた。続古典期の時代は短く、過渡期として、古典期的な要素と後の後古典期を象徴する要素が混在した不安定な時代とも言える。セトルメント・パターンから考察すると、メトロポリスおよびメキシコ盆地内のテオティワカン直轄地においては、古典期から続古典期への連続性は見られず、短期間にはっきりした変化が現れる。続古典期の主要遺跡は、それ以前の住居址とは異なり、不安定な政治情勢を反映して高台、丘の頂上など防御に適した場所に位置する場合は圧倒的に多い。これに反して、後背地としての役割を果たしてきたトルカ盆地は、住居址のパターンに大した異変は起こっていない。古典期後期から晩期にかけて増加の一途を辿った遺跡の 80% は続古典期にも引き続き残存している。この地域ではテオテナンゴの様な防御施設を重視した遺跡は全て後期に入って築かれており、続古典期の初期に建設が始まったわけではない。要するに、トルカにおける古典期から続古典期への変遷は比較的穏やかなプロセスであったようである。

## 5. テオティワカン崩壊後のトルカ盆地—続古典期

こうした状況は続古典期に入ると一変する。表面採集のデータによると、住居址数は古典期の 2 倍以上の 230 に急増している（図 2）。トルカ全域のセトルメント・パターンから見ると、確かにルーラル（rural）的傾向が強く残っているが、この時期に入ると、古典期晩期に既に機能していた行政、催事、宗教儀礼を行う地方センターは発展し勢力を拡大し、さらに新たに設立されたセンターも加わり、スケールの異なる計 13 のセンターが確認されている（Sugiura 2005）。無論、



テオティワカンの様な超地域的メトロポリスは存在しなかったが、続古典期の成熟期には、都市のカテゴリーに相当する大規模遺跡テオテナンゴとカストラワカが現れた。これらのセンターを通してトルカ盆地には独自の政治・経済構成が確立された。この時期を契機にトルカはメキシコ中央高原において、メソアメリカ西部および西南地方からの物資流通の中継地域として、また穀倉地帯として重要な位置を確保した。一方、古典期後期から顕著になった気候の変動、降雨量の減少に伴い、沼沢地の開拓はますます盛んに行われ、低湿地に築かれた住居の数も増え、水の文化の最盛期を迎えた。その一例として、形成期からこの地方で行われていた湧き水 (ojo de agua) に関連する宗教儀礼が、続古典期により盛んに行われていたことが、サン・アントニオ・ラ・イスラ市のオホ・デアグア遺跡の資料で確認できる。

続古典期の物質文化、特に土器は、前時代の伝統を継承する一方、異なった新たな特徴も表している。それは、コヨラテルコ式土器複合 (Coyotlatelco complex) と呼ばれ、メキシコ中央高原、特にテオティワカンと関係の深かった地帯に短期間に普及した。この土器群は各地域内にあるいくつかの土器製作村落で焼かれたもので、1ヶ所で集中的に作られた土器ではないことが中性子放射化分析 (NAA) や粒子線励起 X 線分析 (PIXE) (Crider *et al.* 2007; Nichols *et al.* 2002) による胎土の分析から判明している。しかし、その起源に関しては諸説紛々 (Piña Chán 1967; Rattray 1966; Solar 2006; Sugiura 2006) である。サンダースの率いるメキシコ地域調査隊によって作成された住居址の分布図 (Sanders *et al.* 1979) は、メキシコ中央西部に位置するグアダルレーバ山岳地帯周辺が古典期後期と晩期に急激な発展を遂げたことを示している。この地域はその後、続古典期に入っても繁栄し続け、コヨラテルコ式土器が多量に生産された (Rattray 1966; Tozzer 1921)。また、ラス・クルセス山岳地帯を挟んでトルカ盆地と隣接しており、距離的にも近く、言語民族としても深い関係がある。一方、続古典期に見られるトルカの遺跡数の急激な増加は、メキシコ盆地、特に衰退・崩壊をした「神々の都」テオティワカンを捨て去り、以前から緊密な関係を保ってきた肥沃なトルカへ逆移住した集団の存在を想定しなければ説明できない。かつてないこの住居址のパターンと並行して、盆地全域からコヨラテルコ式土器が出土していることは特筆すべきである。メキシコ中央高原、特にメキシコ盆地周辺の地域と比較して、コヨラテルコ式土器の出土量の多いトルカ盆地が、この土器の中心的生産・発展地域であると言っても過言ではないだろう。また、コヨラテルコ式土器複合体の起源に関しては、グアダルレーバ

山岳地帯が大きな役割を果たしたと筆者は考える (Sugiura 2013)。

コヨラテルコ式土器は、過渡期の特徴を最も良く表している土器複合体と言える。続古典期の不安定な情勢を象徴するかの様に、古典期からの伝統と新たな要素が入り混じっている。一見して、テオティワカン出土の土器とは異なるが、器形、製作および表面調整の技術において大都市の伝統を受け継いでいることは否定できない。特に初期には依然としてテオティワカンを象徴する花瓶壺 (florero) や深鉢の刻線文のモチーフが見られることは忘れてはならない。相違点として言えることは、コヨラテルコ式土器の器形の種類は多くなく、長頸壺や無頸壺を除いた大半は浅鉢であるということである。深鉢も少量ではあるが作られている (図 4)。これらの器形はテオティワカンの伝統を継承している面が多く、形成期から古典期にかけて、あるいは続古典期から後古典期にかけて見られるはっきりした変化とは異なる。一方、柄付き香炉 (sahumador) など、以前使われていなかった器形もある。焼成後の土器の表面の色合いも異なり、ベージュ系、あるいは薄茶色の器面下地が特徴とされる。しかし、何と言っても最大の違いは装飾モチーフにある。コヨラテルコ式土器複合は一目で分かる一連のモチーフで装飾が施されている。多種多様であるテオティワカンの伝統的土器と比較して、土器表面の装飾技法、モチーフは非常に限られている。初期に見られる刻線文様、および白地赤彩土器を除けば、装飾は赤色で描かれた曲線、直線、幾何学文様その他の複雑なモチーフにほとんど限られている。しかし、こうした文様を分析すると、「四葉文様 (flor de cuatro pétalos)」や「爬虫類の目 (ojo de reptil)」といったテオティワカンの土器伝統に採用されていたモチーフが継承されていることが確認される。また、装飾はほとんど鉢類のみに見られ、浅鉢は内側、深鉢は外側に施されている (Pérez 2011, 2017; Pérez *et al.* en proceso; Stoner *et al.* 2014) 傾向が顕著であるばかりか、地域性も強く表れている (図 5)。トルカのコヨラテルコ式土器は装飾モチーフのみならず、中性子放射化分析 (NAA) による胎土分析のデータが示すように、トルカ地域内にあるいくつかの集落で焼かれたものがほとんどである。盆地外から交換システムを通じて入ってきた土器はごく少数に過ぎない (Stoner 2015; Stoner & Glascock 2013, 2014)。同じ傾向がメキシコ盆地でも認められる。

前述した様に、メキシコの中央高原のみならず、メソアメリカ西部および現在のメキシコ州の南部との交換ルートの中継地区であるトルカ盆地は、土器、黒曜石などの物資、あるいは情報が頻繁に交錯する地理上有利な位置にある。こうし





図4 コヨトラテルコ式土器複合体一式



図6 メキシコ州の南部より続古典期に搬入されたエンゴベ・ナランハ・グルエソ式土器(厚手オレンジ色土器)



図5 コヨトラテルコ式土器複合体の代表的装飾土器

た条件を利用して、古典期後期・晩期には近隣地帯と盛んに物資の流通、供給、配布が行われていた。しかし、続古典期に入り、テオティワカンの統治力が衰退すると、トルカ盆地は大国家の支配から脱却し目覚ましい発展を遂げる。一方、地域間の交流ルートの範囲は狭まった。西北限はミチョアカンであり、ウカレオ／シナベクアロ原産の黒曜石が、サン・マテオ・アテンコやサンタ・クルス・アティサパンを経由して、テオティワカン衰退後、重要な都市として発展したモレロス州のショチカルコへ供給された(Hirth *et al.* 2006)。南限はメキシコ州南部に位置するトナティコと考えられ、トナティコ／イスタパン・デ・ラ・サルが生産地と推測されるエンゴベ・ナランハ・グルエソ式土器(Engobe Naranja Grueso; 厚手オレンジ色土器)(図6)という鮮やかなオレンジ色の分厚いスリップで表面が調整された土器が大量に流通した。この土器の分布の南限はマリナルコを超えショチカルコに至る。この様に、長距離交換網を通して運搬された物資の種類が減る一方、搬入された黒曜石と土器の出土量は前時代と比較して相当増加したことが確認されている。こうした状況は、テオティワカンという一大国家によって樹立され、管轄されてきた複雑な機能

を持つマクロ組織が崩れた後、トルカ社会が存続、繁栄するために、主に近隣の地域との間に、前時代とは異なる小規模の交流システムを確立した結果とも考えられる。

過渡期である続古典期は上述の様に社会のあらゆる面で混沌とした時期であった。セトルメント・パターンの再編成、新たな政治勢力の出現とそれに伴う経済の中心軸の移転、コヨトラテルコと呼ばれる新しい土器の普及、といった新たな要素が注目に値する。同時に、偉大であったテオティワカンは既に消滅していたが、その文化が直ちに消え去ることはなく、その後も何らかの形で受け継がれた。特に一考を要するのは、テオティワカンの世界観を象徴する一連のモチーフが続古典期を通して変化することなく用いられたことである。トラロックやウエウエテオトルといった神々と関係の深い金星、巻き貝、二枚貝、ヒトデ、チャルチウイトル(chalchihuitl; 貴石)などのシンボルが引き続き火桶(brasero)や香炉の飾りとして使われた(図7)。恐らく、古典期後期から続古典期にかけて記録された降雨量の減少という気候条件と関係があるのではないかと推測する。こうした続古典期まで続いたテオ



図7 テオティワカンのシンボリズムで装飾された火桶や香炉(古典期後期・続古典期)

ティワカン特有のシンボルは全て後古典期に入ると消え去り、新しいモチーフに切り替わるという現象をいかに理解すべきか、今後の研究課題として残されている。

## 6. マトラツインカ族の台頭とメシカの征服—後古典期のトルカ盆地

コヨラテルコが主である続古典期の土器文化は紀元後1000年前後に急な変化を見せる。これまで、トルカ全域から出土していたこの土器形態はマトラツインカ族の台頭と同時に姿を消す。言語学の研究 (Lastra 1992; Schumann 1975; Wright 2005a, 2005b) によると、紀元後900年から1000年頃に、オトミ系言語集団 (あるいは民族とも言える) はマトラツインカ、オトミ、マサワの3言語民族に分かれた。

後古典期 (後900/1000~1521年) のトルカの歴史は複雑であり、本稿が目的とする問題点と離れるので概略を述べるに留める。トルカ盆地の地域調査によると、形成期から現在に至るまで、ネバド・デ・トルカ火山の西麓および南麓の肥沃な平野は、常に住居址の密度の高い地域であった。マトラツインカ族の集落はまさにこの一帯に密集しており、これらの場所を押さえることによって、最終的にはトルカ盆地の政治的支配権を握った。16世紀の古文書ではトルカ盆地はマトラツインカ盆地とも呼ばれている (Quezada 1972)。この民族は盆地の「戦略的位置 (strategic position)」にいくつかの都市を築き、政治、経済、文化面において盆地内で絶対的威力を振るった (Piña Chán 1975; Quezada 1972; Smith 2011, 2015)。南にはテオテナンゴ (テナンゴ・デ・バジェ市) とテチュチュルコ市の山頂の少なくとも2都市、中央西部にはカリストラワカ・トルカが建設された。また、前時代から既に地方センターとしての機能を果たしていたサンタ・クルス・アティサパンやその他の勢力も衰えることは無かった様である。マトラツインカの勢力は地政学的な視点から見ると、トルカ盆地を越えミチョアカン州にも及んでいた。

セトルメント・パターンおよび土器の分布状態から、後古典期のトルカには、マトラツインカ族の他、オトミ、マサワという他のオトミ系言語民族が共存し、各々独自の土器文化を持っていたと考えられる。オトミ族は主に盆地の東方、南方を囲む山岳地帯、および平野部の中央に集落を構え、マトラツインカとは異なる土器を使っていた。一方、マサワ族と推測される集団の住居址は、トルカの北に位置するイストラワカ盆地に近い地域に広く分布している。こうした地域主義 (regionalism)

は隣接するメキシコ盆地においても同様に認められる現象である。

時代が変わると全てが変化する訳ではない。前期マトラツインカの特徴的土器には続古典期のコヨラテルコの影響が見られる。装飾は全て、赤色で描かれた曲線、直線、幾何学文様である。器形はコヨラテルコと異なり長い三脚付きの浅鉢が多い。器形の種類は以前と比較して減少する。壺、水瓶もマトラツインカ独特の赤彩の直線で装飾が施されている場合が多い。同時代にトルカで共存していたオトミ族は、マトラツインカと異なり、コマル (comal) と呼ばれるフライパンをさらに広げたような調理用具を使っていた。コマルの他、口縁が内弯する無頸壺、長頸壺類の3つに器形は限られており、胎土は雲母を含み、外側表面には薄い赤色のスリップ (泥漿) が施された。土器の特徴などから、山岳地帯を主に居住地としていたオトミ族の質素な生活状況がうかがえる。一方、盆地の北に分布するマサワ族の土器は、レルマ川上流北方のテマスカルシンゴ・イストラワカ盆地を起点に南に分布し、前述のマトラツインカ族やオトミ族の土器とは異なった特徴を有し、多色彩の深鉢、浅鉢、壺などがある。

結論として、形成期から続古典期までは中央高原の広い範囲に広まる特有の土器圏というものが存在していたが、後古典期に入りこうした伝統が崩れ、各地域内でその土地に応じた土器文化が繁栄した。地域主義と言われる地方色豊かな文化は、後古典期後期のメシカ帝国 (アステカ王国) の建国後、つまり三都市同盟の設立後、周辺諸地域が征服され、メシカ独特の土器複合体が急速に広がるまで続く。各地域を特徴づける土器群は続古典期からの発展過程の延長として理解できる。また、アイデンティティーの指標であるこうした物質文化は、後古典期のメソアメリカの政治・経済事情を反映しており、小規模な都市国家間の勢力争いが引き続き盛んであったことを示唆している。

後古典期後半、1476年、メシカ帝国 (アステカ王国) の王、アシャヤカトゥルによってマトラツインカが征服されると、トルカの歴史は一転する。テオティワカンと同様、三都市同盟にとってもトルカは不可欠な穀倉地帯であった。アステカの侵入はこの地域の社会全体に影響を及ぼした。表面採集および試掘調査によって、メシカによる征服を契機とし、小規模レベルの村落の住居址数が急激に増加し、盆地全域にアステカを象徴する土器様式が出土し始める。セトルメント・パターンにも変化が見られ、後古典期前期に発展したマトラツインカの都市は、後期に入って三都市同盟の統治下でも引き続き繁栄していたと見られる。一方、アステカの侵入と共に、黒い線条の複雑なモチーフで彩文されたアステカ III 様式、赤彩テ



スココ土器などの帝国の代表的土器文化がトルカ全域で現れるようになる。前期のマトラツインカの特徴的な赤彩文の二色土器から、後期の赤地に黒や白で文様が描かれた多彩色土器に変化する。長い三脚付きの皿も出現する。マトラツインカ後期の土器はアステカの土器とも異っており、前期から後期への著しい変化が、どの様な原因によるかは現在の所解明されていない。

## II チグナワパン湖 での人と水の生活 形態

### —ケーススタディとしての サンタ・クルス・アティサパン

チグナワパン、チマリアパン、チコナワパンと呼ばれるトルカ盆地を象徴する3つの浅い湖は、本稿の初めに述べたように、水位も低く、長期気候の変化、雨期・乾期による年間降雨量の変化に対応し、時には湖ともなり、時には低湿地ともなる。湖畔の住民に限らず、アルト・レルマ盆地とも呼ばれるトルカ盆地に定住する全ての人々の生活は、3つのアルト・レルマ湖とそれを結ぶレルマ川との共生関係の上に成り立っていたとも言える。今から20年ほど前まで、世代から世代へと何百年もの間、住民の記憶の中で伝えられてきた太古からの知恵と伝統に基づいて、浅湖という特殊な生態環境に適した生業形態を保ってきた。採集、漁撈、狩猟といった比較的単純な技術で、ここに生息する生物資源を確保し、日常生活において必要な物資を獲得する生業が実践されていた。このような生業形態は、多機能を備えた用具や比較的単純な技術で充分成り立つが、季節、場所、時間、あるいは生物資源の生態条件といった身近な風景の熟知を必要とする。

また、1940年代以前には、東畔に沿って数多くの泉、あるいは湧き水から良質な飲み水が豊富に得られたことも、この地帯がいかに重要であったかを物語っている。

地域調査から得られた情報は、前述したように、3000年以上に及ぶトルカ盆地の社会の発展を理解することは、水、特に盆地を象徴する三湖沼およびレルマ川との関係を考慮せずには不可能であることを示唆している。一方、古典期、続古典期においてトルカ盆地で顕著に見られる複雑化の過程

は、テオティワカンとの関係を考慮せずには理解できない。

1993年より2年間に渡って行った、湖と川の生業形態に関する民族考古学調査から次の様なことがわかった。湖と川の生業形態を基盤にする生活様式は、海の漁撈形態と異なり、一定の生態環境、特に水位と水質が保持されれば継続可能である。また、使用される用具は、海の漁撈活動に必要である専門的技術や特殊な道具とは異なり、比較的単純で多様性を有する。むしろ重要なのは、古来伝承されてきた生物資源の生態環境に関する日常の知識・知恵・習慣である。前述の資料、および1979年に行われた試掘のデータに基づき、1997年、本格的にサンタ・クルス・アティサパン考古学調査を開始した(Sugiura 1997)。

この遺跡は度々述べて来たように、トルカ盆地の東南で重要な役割を果たしてきた地方センターであり、古典期後期から後古典期にかけての長い歴史を持つ。ラ・カンパナ・テポソコと呼ばれる行政・儀礼を司る中核地と、湖中の水産資源の供給地と見なされる住環境エリア (sustaining area) とに大きく二分される。調査目的は、主に2つである。第1は、この遺跡の発展過程において、メソアメリカの一大国家であったテオティワカンとの関係が及ぼした影響を解明すること。第2は、本稿の課題である、人と水との関わり合い、当時の生活史を復元すること。特に気候の変動で時に低湿地ともなるチグナワパン湖沼での不安定な生態環境に人々はどのように適応し、ボルド(bordo)と呼ばれる小規模な居住地を築き、独自の生業形態を持続したのか、そして、数百年に渡り湖沼内で人々はどのような日常生活を行っていたのかを解明することである。

一言で水の生活と言っても、決して単純な暮らしではない。現在サンタ・クルス・アティサパンに暮らす住民から、かつての生活について聞き取り調査を行うと、ボルドと呼ばれる人工的に構築された住居での暮らしは、多種多様な要素や局面が複雑に絡み合う日常生活であったことが理解できる。500年近い年月を湖沼という独特な環境と闘いながら、独自の水の文化を築き上げてきた人々の日々の全容は、未だ解明されていない。これらのボルドが分散する地区は、ラ・カンパナ・テポソコと称される中央行政地区へ水産資源を供給し、反対にこの地区に集められた外来土器、黒曜石、その他の奢侈物資はボルド地域へ再分配された。本節ではこの日常生活を構成する数多くの要素のうち6つ——1) ボルドの分布図、2) ボルドの住民、3) 建築様式と公共スペース、4) 湖沼内の日常生活、5) 食生活に見える日常生活、6) 精神生活(死者の祭り、生業用具の儀礼的価値)——に焦点を当てて考察する。まず考慮すべきは、サンタ・クルス・アティサパンの



歴史と切り離せない関係にある、古代気候、環境の変化である。この沼沢地内に人工的に築かれたマウンドで居住生活が可能であったかを検証するには、今から1500年ほど前の古代気候、環境状態を把握しておかなければならない。判明したことは、ボルドが構築された古典期後期は、気候の乾燥化により降雨量が減少し、水位が低下し、これまでの浅湖は低湿地となった。こうした環境は後古典期に入り再度の気候の変化で雨量が増し、チグナワバン湖の水位上昇が観測されるまで続く(Caballero *et al.* 2002; Lozano *et al.* 2009; Lozano *et al.* 2005; Valadez & Rodríguez 2009)。また、1年を通して、雨期・乾期によってどの様に環境や風景が変化するかを理解することも必須である。

## 1. ボルドの分布図

ボルドはラ・カンパナ・テボソコの西南地域に分布し、1979年度の表面採集でその存在が明らかになった。当時のデータでは、分布の範囲は約1km<sup>2</sup>に及び、ほとんどは低いマウンド状であり、高さ1mを超えない。当時はドローンが普及していなかったため、分布の全体像を把握するにまず低空飛行で得たデータを基に測量図を作成し、この基本図に水素バルーンで写した赤外線写真、そして1950年代および1980年初めに撮影された市販の航空写真を重ね、各ボルドの面積、高さ、分布状態を調査した。この地図を基に、2004年に地中レーダー探知機で各ボルドの探査を行い、マウンドの中心地点に直径10cmのアース・オーガーで穴を開け、構築されたボルドの編年を確定した。また、磁気探査および電気抵抗探査で得られたデータを活用し、各ボルドの内部構造を表面から把握する試験的調査も行った。これらのデータから、チグナワバン湖沼における環境整理・開発という大規模なプロジェクトの開始は、古典期後半の後450年頃にまで遡ることが確認された。ボルドの数は合計、約100基で、ラ・カンパナ・テボソコの南を源流とするレルマ川以北に分布している。サンタ・クルス・アティサパンの住環境エリアであったこの地帯の住居社が全て同時期に対応する訳ではない。初期に構築されたが後に廃墟化したボルド、続古典期に入って造られたボルド、後古典期の水位上昇でこの地域一帯の住居が放棄されるまで500年近く利用されたボルド、と様々である。分布図から推測すると、新しく構築されたボルドは往々にして古いものに隣接する様につくられた。また、杭で固定された木材の配置などの発掘資料から、基礎に木材を利用しその上に土を盛った土橋でボルド間が繋がっていたと推測される。別名イスローテ (islote) とも呼ばれるボルドには大き

さに差があるが、ほとんどが円形か楕円形をしている。ごく少数を除いて、1軒かせいぜい2軒の家が建つ直径15mから25m程度の狭い面積のものが大半を占め、耕作地、その他の生産活動に使用される空間はなかった(図8)。

居住目的のイスローテの建築工程は複雑で、時代、場所および地下の安定性、支える建造物の重量によって基礎に使用される材料が異なる。発掘資料によると、少なくとも2つの基礎造りの方法が採用されている。周辺に群生する葦を敷き分厚い基礎を築く場合と、盆地の東南を囲む森林から運ばれた木材、特に松や杉類の枝と葉を無造作に敷き詰める場合に分けられる(図9)。

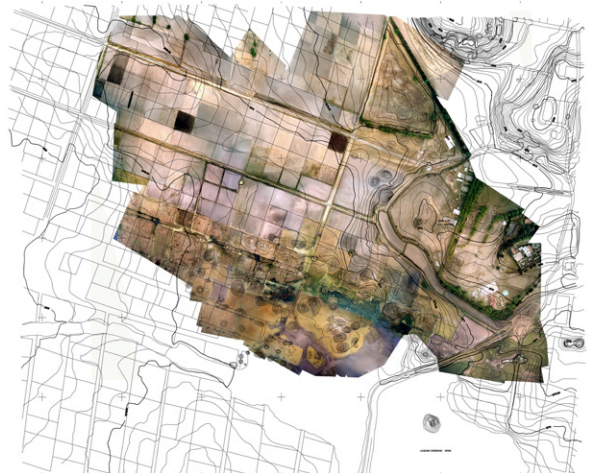


図8 サンタ・クルス・アティサパン遺跡と住環境エリアのボルドの分布図



図9 ボルド(イスローテ)の建築工程・基礎づくりに使用された松や杉類の木材

## 2. ボルドの住民

チグナワパン湖沼内に居住地を開拓するという大計画は、ラ・カンパナ・テポソコで行政、宗教行事を司る、この地域センターの統治者であるエリート階級の指揮下でなければ実現されなかったものである。発掘で出土された人骨のDNA (Buentello *et al.* 2009; Muñoz *et al.* 2014) および形質人類学 (Morales 2017; Torres 2004) の分析によると、ボルドの開拓者集団は現在のオトミ系民族と類似しており、近親婚を行っていた可能性が高い(図 10)。

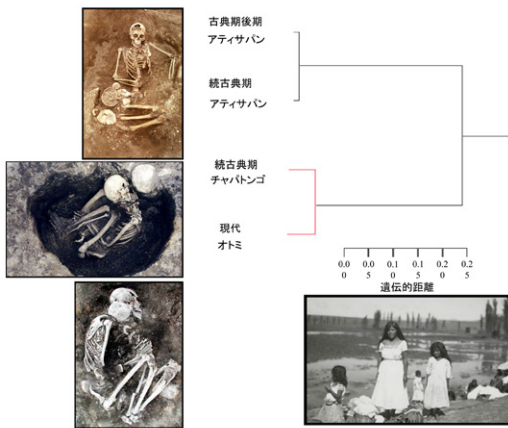


図 10 ボルド住民の DNA 分析とオトミ族との関係

オトミ系民族はメキシコ中央高原に住み着いた集団の中で最も古い歴史を持っている。15 世紀後半、メシカに征服されナワ語族の移住が顕著に現れるまで、トルカ盆地がオトミ系民族の居住地であったことは、マトラツインカ、オトミ、マサワ言語民族全てがパメ・オトミ系言語集団に属するという事実と、前述の分析データから判明している (Lastra 1992; Wright 2005a, 2005b)。

## 3. 建築様式と公共スペース

イスローテの住民が環境に適切に対応していたことは、ボルドの規模や機能の違いにより、建築に使用される資材の使い分けを行っていたことから明らかである。発掘資料によると、床面積は約 20m<sup>2</sup> で、石を並べた土台を有し、土塀か、現在でも一部の村落で使われているテハマニル (tejamanil) と呼ばれる幅 10cm ほどの平板を塀として利用していた様である。炭化したイネ科の植物が厚い層をなして出土していることから、屋根は民族考古学調査の資料にもある様に、ごく最近まで、この地方で使われていたサカトン・デ・モンテ (zacatón de monte) で葺かれていたようである (図 11)。



図 11 サカトン・デ・モンテで葺かれた屋根 (民族考古学資料)

この一帯には、一般の家屋の他、公共の場所も造られていた。湖沼集落の中心的位置に築かれた 20 号ボルドには、通常の民家面積の 5、6 倍にもなる公共的特徴を持つ建造物が存在していた。この大ボルドは古典期後期 - 晩期 (後 450~550/600 年)、つまりチグナワパン湖開拓の大計画の初頭から既に公共スペースとして位置づけられており、湖沼集落が終末を迎える続古典期 (後 600~900/1000 年) の終わりまで継続的に使用されていた。公共建造物はこの 500 年近くの間、東西の軸は多少変化してもほとんど同位置で建て替えが行われており、古典期に 4 回、続古典期に 3 回、計 7 回実施された。正面には狭い広場が設けられていた。建て替えの主な理由は、各時代の建築様式の変化、および地盤沈下問題を解決するためであった。古典期の建造物にはテオティワカンの影響が顕著に現れており、床面は長方形で、周辺は石で補強されてある。特に、一番古い第 7 建造物は周辺の建築物より床面が 60cm ほど高く、祭壇的な外観を持っていた様にも考えられる。第 4 建造物の入り口近くの床上で発掘された長方形の大型の炉 (80cm × 60cm) から大量の炭化した葦 (*Cyperus*) と思われる植物の出土、さらに象徴的な副葬品を伴った屈折葬 (no.10-2000) の検出から、この建物内で様々な儀礼が行われていたと推測できる。7 基の公共建造物の内、古典期後期に建てられた最古の第 7 建造物の西壁には階段が備えられおり、両側はテオティワカン建築様式の特徴であるイスタバルテテ (ixtapatete) と呼ばれる玄武岩のスレートを用いた低いタラー式の壁で覆われており、階段は聖なるネバド・デ・トルカ火山を臨めるように配置されている。またこの西壁からは、アルメナ (almena) と称される、テオティワカンを象徴する遺物も出土している。最大の相違はテオティワカンの建造物で見られる様な漆喰の使用はなく、土壁が細かい砂と泥と水を原材料として上塗り (厚さは 5~7mm ほど) が施されていることである。

テオティワカンの崩壊と共に、公共建築様式も一変する。続古典期に建設された 3 基の公共建造物の内、最後に建て



られた1基は遺跡形成過程において、跡形なく破壊され、一部の痕跡しか残っていない。続古典期の残りの2基(第2、第3建造物)は円形の床面であり、床は2、3層からなり張替えが行われていた。最下層は、近隣から運ばれたオレンジ色の土で、次の層ではテソントレ(tezontle)と呼ばれる火山岩が湿気除去の目的で使用されていた。床面である上層は厚さ4~5cmを超える。材質は判明していないが、コンクリートに匹敵するほどの硬度を持っている。10cm 間隔で埋め込まれた木柱で床の周辺を囲み、その外側には大きさの異なる石が厚さ1m 弱積み上げられ、建築物の土台を成している。出土状況から想定すると、壁はバハレケ(bajareque)と呼ばれる、現在でもメキシコの田舎では良く使われているイネ科の植物と混ぜ合わせた土塼であった様だ(図12)。沼沢地の環境加工という大計画を成功させた指導者は、この公共スペースおよび建物の建築工程を実行する適切な技術と知識を持っていた。また、これらの公共建造物は湖沼内に居住する各家長が定期的に集まり、年中行事、年間の生業計画、その他、集団の生存に関わる問題を討論する公共の場所であったと推定される。

## 4. 湖沼内の日常生活

注目すべきことは、床に掘られた浅い窪みに破損した壺や鍋を固定して造られた、囲炉裏、あるいは竈のような遺構が数多く検出されることである。煮炊き用の囲炉裏は周囲が石で囲まれ、その上に鍋や煮物用の壺を乗せる構造で、薪をくべる焚き口を伴う。こうした炉と異なり、床、あるいは地面に直接設置された囲炉裏は既に焼けて赤くなった薪をくべるためだけに用いられたようだ。その数の多さはボルドの住民が日常炊事に使用する数を遥かに超えている。また、住居と直接関係のない場所に配置されている状況から、恐らく、海拔2580mで耐えなければならなかった寒さと、湿気の高い湖沼内の厳しい環境の影響を軽減するために、この様な解決策を考案したのではないかと推測される(図13)。

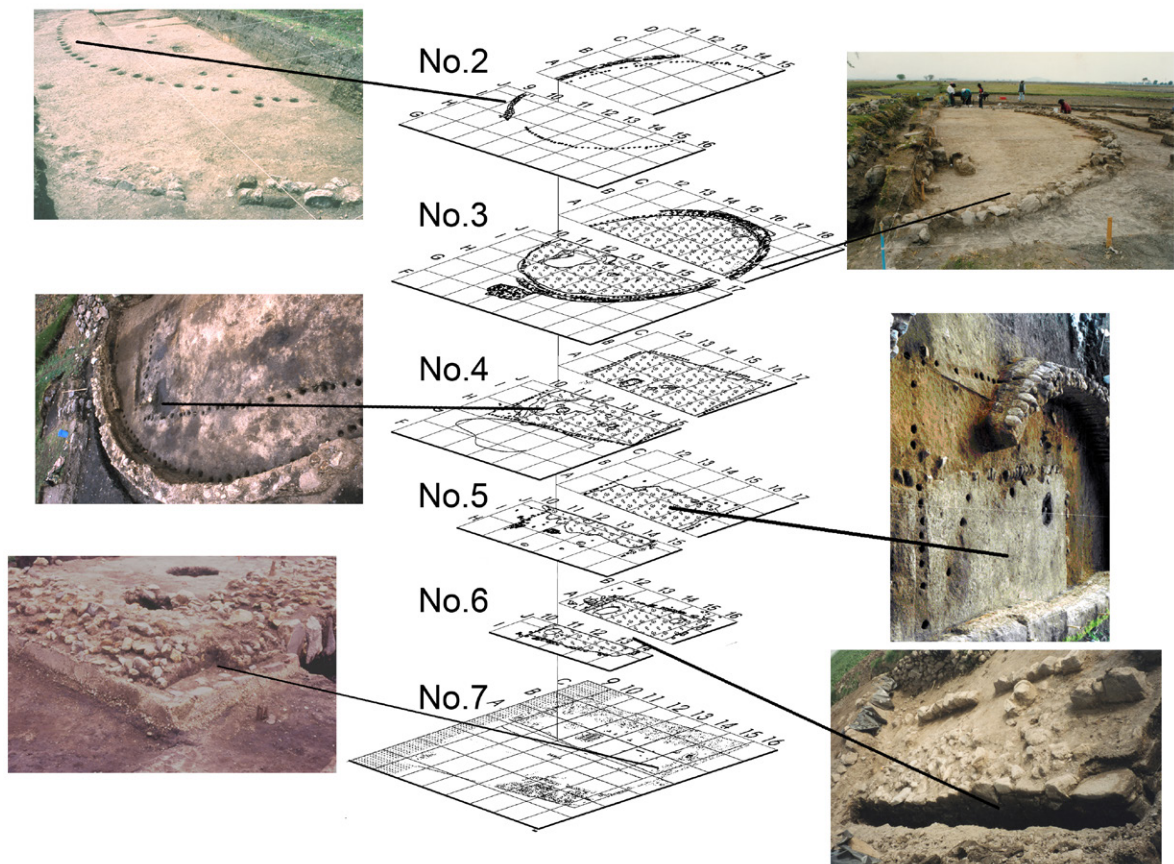


図12 公共建造物: no.2-3 (続古典期の円形建築); no.4-5 (古典期後期と続古典期の過渡期); no.6-7 (古典期後期)





図 13 寒さ、湿気を和らげる目的で供えられた「囲炉裏」

## 5. 食生活に見える日常生活

耕作地のスペースを持たないホルドの住民は、農産物の確保は内陸の集落に依存していた。炭化した種の同定によると(Martínez 2007; Martínez & McClung 2009)、トウモロコシはもちろん、豆、その他の耕作物のみならず、畑周辺の様々な野生の植物をも食料としていた。また、動物遺存体の研究成果からは、狩猟で得られる鹿、ウサギ、イノシシなどの他、家畜であった七面鳥、犬、その他の動物が食材として盆地周辺の森林地帯から交換によって入手されていたことを示唆している。もちろん、周囲の湖沼環境に適応した採集、漁撈、狩猟を基盤とした生業形態を営んでいたイスローテの人々は、年間を通じ、近郊で得られる水産物資、鴨や鴈といった水鳥など、季節によって異なるものを日常の食材 (Valadez & Rodríguez 2009) としていた(図 14)。一方では、こうした湖沼固有の物資は周辺の集落との欠かせない交換品でもあったのである。チグナワパンの開拓者は多様で豊かな食生活を送っていたのである。XRF (蛍光 X 線分析) による人骨の検査結果も、サンタ・クルス・アティサパンの人々は、テオティワカン都市の人骨と比較して良質な食事摂取を行っていたことを示している (Velázquez 2015)。しかし、形質人

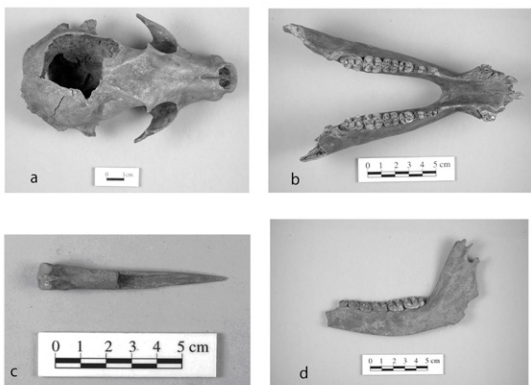


図 14 発掘検証された一部の動物の骨；a: アライグマ、b: ベッカリー、c: オオカミ、d: シカ

類学分析 (paleopathology) では、栄養失調や歯周病、その他の病気の痕跡が確認されており、当時の生活環境を考慮すれば当然とすべきであろう。また、ルーティンの日常活動が様々な形で男女の人体にそれぞれ異なった影響を与えていたことも、出土した人骨の研究から明らかとなっている (Morales 2017)。

何と言っても、メソアメリカ食生活を象徴するのはトルティジャである。一般には、トウモロコシを石灰入りの水で煮、すり石で粉状にしたニスタマル (nixtamal) と呼ばれる粘り粉で作る厚いクレープ状のものをトルティジャと言う。これをコマルで焼く習慣は、メソアメリカ形成期から継続的に実践されてきた代表的食事方法であると言われてきた。確かに、発掘資料の中でコマルの存在は、今から 2500 年ほど前、形成期中期まで遡るがその出土量は非常に少なく、トルティジャを焼くために日常使用されていた調理道具とは考え難い。日常炊事の用具として不可欠な土器ではなかった。むしろコマルは、後古典期後期つまり紀元後 14 世紀のアステカ様式 III の一部として急激にその出土量が増大するまで、日常使用される土器のなかで極少数しか占めていない。要するにトルティジャとコマルは常にセット関係にあると提言するのは間違えであると考えられる (Sugiura 1996)。

確かに、ニスタマルなしにメソアメリカの文明を理解することは出来ない。現代でもニスタマルの料理法には色々あり、トルティジャという形のみで食されるとは限らない。分厚くパン状にして食すこともある。サンタ・クルス・アティサパンの場合、コマルの割合は全出土土器の僅か 2.39% に過ぎない。古典期の 1.63% という低い数値から、続古典期には 2.82% と多少の増加が見られるが、いずれにしても、日常の炊事に欠かせない道具としては僅かな出土量である。器形もアステカ時代を代表するフライパンの様な平底ではなく、底部が僅かに尖底になっている形が大半を占める。こうしたコマルは豆、その他の種 (たね) 類を炒るのに現在でも良く使用されていることが民族学のデータで分かる。また、残渣分析によるとサンタ・クルス・アティサパンのコマルには、ニスタマルに必要な石灰が使用された痕跡があまり認められない (Obregón *et al.* 2019; Terreros 2013)。これに関して、民族考古学調査の情報から興味深いことがわかった。この遺跡の近辺では、最近まで石灰が入手困難な場合、無料で手近に得られるリュウゼツラン科の一種であるマゲイ (maguey) の葉の灰が、石灰の代わりにニスタマルの生成法として用いられていたと言う。確かに、古典期から続古典期にかけてサンタ・クルス・アティサパンに居住した人々がニスタマルを使って料理したものを主食としていたことには違いないが、ニスタマルの生成法や

調理法そしてトウモロコシの食し方は、時に応じた生活環境によって色々異なっていたことが、以上から理解できるだろう(図15)。



図15 コマルの器形(古典期/続古典期)

炊事や食事は日常生活 (Sugiura *et al.* 2019) で重要な位置を占めるルーティンである。食材を獲得し、用意した材料を煮炊きし、食事を摂り、後片付けをするという一連の行動に掛ける日々のエネルギーと時間は、日常生活に研究の焦点を当てる考古学においても重要視されるべきである。前述したように、食材は水産資源の他、近隣の平野部の耕地から得られる農産物、森林地帯の動植物など多様であったことは、分析された人骨の栄養状態でも明らかである。食事に纏わる一連の資料の中で、炊事道具は大きな割合を占めている。中でも、土器と石器は考古学者にとって、一番馴染みの深いものである。特殊なメソアメリカの文化において、土器は、社会生活の色々な領域の情報をもたらしてくれる。食事という日常のルーティンに必要な道具であり、器種の中で多数を占めるのは壺類である。しかし、残渣分析の結果によると、その用途は広範囲に及び煮炊きに限られてない。口径は17~66cm あるが、70%は14~26cm に集中している。長頸、短頸、長胴、円形胴部型などの器形がある。こうした壺は水の保存、食材の貯蔵、あるいはごく最近の民族考古学のデータにある様に、食器類の保管にも用いられていた。一方、口径の広い無頸壺、あるいは鍋の用途は比較的限られており、主に煮物に使われることが多い (Obregón *et al.* 2019; Pérez 2002, 2009; Pérez *et al.* en proceso)。調理された料理は、碗に近い浅鉢で食事をとっていたと推測される。日々

の食生活で使用された土器用具の破片、完形品、半完形品を含めると、全体の80%以上を占めている。壺や浅鉢など食事に使用される容器も時代と共に変化し、古典期に多い胎土と続古典期の胎土は異なる。コヨラテルコ式土器では白雲母 (mica muscovite) を含む胎土が現れ始める。これは、これまでの製作工程、そして需要と供給のルーティンを破る現象で、ジャンニニ (Giannini 2004) の唱えるトランスグレションに相当すると考えられる。しかし、こうした傾向も時を追うと共に安定し、続古典期を代表する胎土となり、日常生活に欠かせない土器の製造工程でルーティン化された。

メソアメリカの生業用具として、また食生活でも必要不可欠なもう1つの道具は、打製ないし磨製石器である。中でも、重要なのはすり石とすり棒である。主食のトウモロコシはすり石でひいて練り粉状にするので、メタテ (metate) と言われるすり石とマノ (mano) と呼ばれるすり棒は無くしてはならない。このような磨製石器は主に手近に得られる玄武岩で作られていた。一方、食料の確保や調理用器具として、黒曜石や珪石 (silic) で作られた打製石器も重要であった。サン・マテオ・アテンコでの黒曜石の石核と石片の出土状態から推測すると、地域外から交換物資として母岩や石核が搬入され、槍、投槍、鏃、ナイフなど、日常生活で必要とされる道具を各々の村落で加工されていたケースが多い様である。

## 6. 精神生活(死者の祭り、生業用具の儀礼的価値)

精神的側面が日常生活で重要な位置を占めることは言うまでもない。発掘出土品を検証してみると、このチグナワパン湖沼内に居住した人々の間では、多種多様な儀式、宗教行事、冠婚葬祭、その他の祝い事などが盛んに行われていた様である。オカリナ、笛、土偶、コパルの樹液から作られる香や松脂を燃やす火桶や香炉は、精神生活の一面を表している。こうした祭祀や行事で使用されるモノに関して特筆すべきは、大都市テオティワカンが崩壊した後も、テオティワカンの伝統を受継いだシンボリズムを示す文様全て(種々の貝類、ヒトデ、人顔、トラロックなど)が火桶の装飾に使われていることである。しかも、雨あるいは雷鳴の神(トラロック)と深い関わりのあるモチーフが大半を占めていることから、いかに人々が雨や水に関心を持っていたのかがわかる(図7)。

メキシコ盆地で一番乾燥度の高い地域に築かれた大都市テオティワカンの場合、トラロックに良い雨を祈願し豊作を祈ることは、統治者や神官にとって必須の行事であったに違いない。しかし、サンタ・クルス・アティサパンの人々にとって、



雨は両義的な影響を及ぼす恐れ多い自然現象である。住民は多過ぎもせず少な過ぎもしない適度の雨量を願っていた。過量な降雨は湖沼の水位を上げ、続古典期末時に起こった様に、イスローテにおける生活は不可能となる。逆に雨量が少な過ぎれば、湖沼の枯渇にも繋がり、食料として重要な水産資源の捕獲などを不可能にする。雷鳴の神やそれを象徴するモチーフを表すことは、使われる環境によって異なる意味を持つ可能性があることに注視すべきであると考え( Nuñez 2019; Silis 2005; Sugiura & Silis 2009)。

精神生活の一面は他にも表れている。前述した様に、チグナワパン湖の住民は採集、漁撈、狩猟という生業形態を生活の基盤としていた。漁撈では、少なくとも前述の打製石器の他、土製の1.5cmほどの梨形の錘や、特定の土器片を削って円形にして両端に切れ目を入れた錘が使われていた。また、狩猟には黒曜石や珪石で作られた槍や鏃の他、吹き矢筒に入れた直径1cmほどの土製の玉が使われていたことを、発掘出土品、民族資料、そしてスペイン征服以前の土器に描かれたモチーフなどから知ることができる。こうした用具もルーティンを破るトランスグレション的行為として何らかの行事、ないしは儀式で使用されることがあった様である。それは、コピトフ(Kopytoff 1986)が提唱するモノのライフヒストリーにおける役割や価値の変化性にも関わっていると思われる。こうした実用品の多義性を最も良く表しているのが発掘で出土したいくつかのコンテキストである。吹き矢筒の玉や土器片で作られた多数の錘が、一塊になって出土する状況から、日常の生業活動の成功を願う目的で意識的に供えられたと推測することも可能である(図16)。

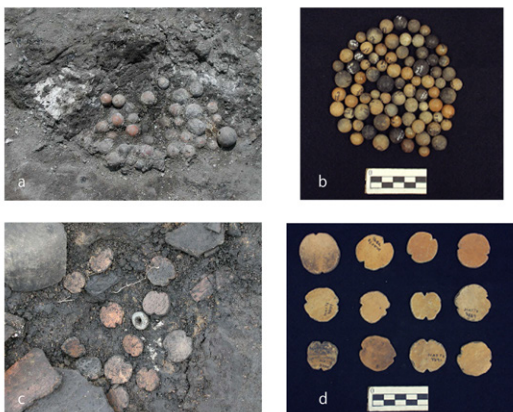


図16 a: 供え物として置かれた吹き矢の玉一式; b: 吹き矢の玉; c: 奉納物としての土器片の錘; d: 土器片の錘

埋葬、死者の祭りは精神生活の一側面を顕著に表しているトランスグレション的行為である。しかし、ジェニイニの説を幅広く解釈すると、この行為も考古学的時間、つまり50年、

100年あるいはそれ以上長い物理学的年月から見ると、ある時点ではトランスグレションと見られるアクションがルーティン化された事例と解釈することも可能である。サンタ・クルス・アティサパンにおいて特筆すべきことは、埋葬された62体の人骨(男性5、女性16、その他41は性別不明)の内、乳児(0-4歳; 出生直前の胎児を含む)が46.8%を占め、幼児(5-9歳)は12.9%に相当する。つまり、幼児の人骨は、全体のほぼ70%に達している。この内、人身供養とされた埋葬例がどれほどの数であったかは定かではないが、8歳未満の幼児8体(4体は一次埋葬で、その他は二次埋葬)は、同じコンテキストから出土している(埋葬3、2001年出土)。この事例については、自然死した幼児の遺体を祀るのが目的というよりは、人身供養の為に行われた儀式であったと解釈した方が合理的と考えられる。メソアメリカ、少なくとも中央高原において、幼児が雨乞いの儀式で雷鳴の神トラロックに捧げられる習慣が古文書に記録されていることを考慮に入れると、こうした埋葬が幼児の人身供養であった可能性がある。

もう1つ特殊なトランスグレション的行為のケースは、埋葬5(2000年出土)(図17)である(Sugiura *et al.* 2003)。埋葬されていたのは初産中に死亡した若い女性(15-20歳)で、仙骨部の外に胎児の半分が出て、下半身は胎盤の中に残っている状態で発掘された。恐らく埋葬後に胎児が体内から

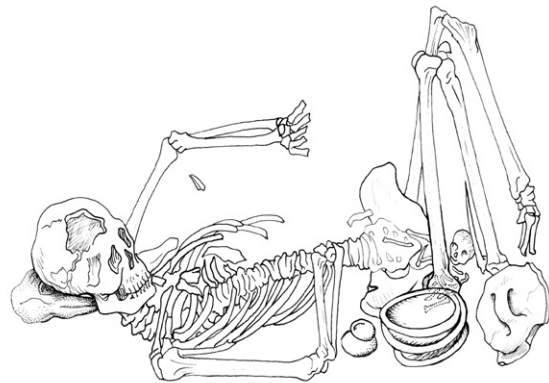


図17 埋葬5(2000年出土) 若年女性、胎児と副葬品



押し出されたと考えられる。頭蓋骨は西に聳える聖なるネバド・デ・トルカ火山の方角を向いており、目前にはレルマ川が流れている。サアグンをはじめとする記録者が種々の古文書に記述しているばかりか、多くの研究者 (Barba de Piña Chan 1993; Bray 1968; Dahlgren 1976; Graulich 1981; López Austin 1990, 1994; Quezada 1977; Rodríguez de Shadow 2000; Soustelle 1961, 1996; Vargas & Matos 1973; Viesca 1984) が無事初産を果たせなかった女性に関して論及している。メキシコ中央高原において、この様な死亡を遂げた女性はメシカ社会の宇宙観、あるいは宗教観において特別な扱いをされていた。分娩過程で死ぬことは、戦いで命を失った男に匹敵する最高の荣誉とされ、その女性は女神または女戦士シワピピルティン (cihuapipiltin) と見なされた。ロベス・アウスティンはこの様な宗教観はメソアメリカの世界観の中核にあり、メシカ以前から既にあり、現在のテペワ族の間でも認められ、長い歴史を持っていると主張している。この説と埋葬5(2000年出土)で認められる事実に基づけば、上記の信仰は古典期終末期から続古典期の初頭(後550/600年)に遡ると言える。

この埋葬は20号ボルドで発掘されたものの中で、副葬品の数が一番多い上、象徴的特徴を持つ遺物が目立つ。三重に重ねられた浅鉢の中に赤い顔料の粉が入っていた他、ミニチュアの浅鉢、突起の装飾で飾られた儀式用の火桶、把手付き香炉(sahumador)の一部など、供え物である土器は被葬者の腰の右側に集中して配置されていた。その他、石器類も出土している。副葬品の中で注目されるのは、女性の頭蓋骨の下から出土した犬の頭蓋骨であろう。サアグン(Sahagún 2000)によると、死者は長い過酷な旅を強いられ、4年後死者の国ミクトランに辿り着く。初めに渡る川はチグナワパンと呼ばれ、死者が犬に乗ってこの川を渡り無事死後の世界へ着くことが出来る様に、犬を死者と共に埋葬する習慣があったと述べている。

シワピピルティンと呼ばれる、分娩を終えずに死亡した若い女性は、雲、水、湿気、風、寒さとも深く関係づけられていた(Aramoni 1998; López Austin 1994)。簡潔に言うと、この埋葬を構成する全ての要素は、生殖に関わる複雑かつ象徴的な意味を表している。トルカ盆地の湖沼を開拓し、小さな島を築き居住した人々は、降雨量などの環境の変化の影響をまともに受けていた。水の生活を維持するためには、自然とのバランスを保つことが必要であり、そのためには神々、特にトラロックの恩恵に授かり、できる限り超自然世界と平穏な関係を維持することが必須の条件であったのである。

## 7. 地域内外との物々交換、情報交換関係

完全な自給自足は人の社会では存在しない。イスローテの住民も決して完全な形の自給自足、つまり閉ざされた生活を送ってはいなかった。前述した様に食生活の基盤であるトウモロコシさえ近隣の集落から取得していた。盆地内の交換ルート網は複雑であり、物資、特に各集団で不足している必需品は、こうした交換網組織を通して調達されていた。ボルドの発掘資料によると、チグナワパン湖沼内の居住者は、トルカ盆地内のローカルネットワークを利用するだけではなく、地域外との長距離流通システムを通して日常生活に欠かせない一連の土器類、食生活に必要な塩、石灰など様々な必需品を得ていた。

盆地内外を結ぶ交換ネットワークで配分された物資は、サンタ・クルス・アティサパンの行政、儀礼、宗教行事を司る中心部ラ・カンパナ・テボソコに集積された後、ボルドの住民に再配布されたと推測される。ただし、長距離流通網は政治的背景の変化に応じて再編され、それに伴い交換される物資も変わる傾向が見られる。20号ボルドと北西に隣接する13号ボルドの発掘調査から出土した土器の分析を基に構築されたメガ・データベース(600万点を超えるデータで構成されている)を検索すると、時代と共に地域外から得られた土器の組成、および交換システムの状況が明確に把握できる。

古典期後期には、多くのボルドがレルマ川沿いに造られた。チグナワパン湖沼が開拓され始めたこの時期に、メキシコ盆地内でテオティワカンが全盛期を迎える。メソアメリカ最初の大都市の管轄下で、長距離流通網が組織され、テオティワカンと直接的あるいは間接的な関わりを持ちつつ、メソアメリカ各地域は複雑な交換システムで結ばれていった。その後衰退期に入ると、このメカニズムに変化が現れる。特に中央高原では崩壊途上の大国家の政治力が衰えを見せ始めると、テオティワカンを経由せず、直接地方同士で組織した小・中規模の交換圏を通し、物資が活発に流通するようになった。サンタ・クルス・アティサパンもこの時期、中間距離ないしは近隣の地域と頻繁に物資を交換している。出土した土器や石器の多様性は、この時期以前には見られなかった状況を示している。

土器については、古典期後期に次の4種類がトルカ盆地に搬入された(Florentino 2015; Jaimes *et al.* 2019; Kabata 2010)(図18)。ロサ・グラヌラー式土器(Rosa Granular)は567点、エンゴベ・ナランハ・ディルド式土器



図 18 古典期にトルカ盆地に搬入された一連の土器 (古典期)

(Engobe Naranja Diluido)は 1091 点、エンゴベ・ロホ・フォラネオ式土器 (Engobe Rojo Foráneo) は 724 点、最多の出土数を誇るミカ・アブンダンテ式土器 (Mica Abundante) は 3555 点出土している。NAA (中性子放射化分析)、XRF (蛍光 X 線分析)、XRD (X 線回折) による化学組成分析法で検証した結果、ロサ・グラヌラル式土器はテオティワカンで出土している同名の土器とは異なり、近隣のモレロス州辺からサンタ・クルス・アティサパンへ搬入されていたことが判明した。エンゴベ・ロホ・フォラネオ式土器の原産地ははっきりしないが、ミチョアカン州ではないかと推測されている。ミカ・アブンダンテ式土器はその名が示す様に、胎土が黒雲母 (mica biotite) を含んでいるが、トルカ盆地の雲母は白雲母 (mica muscovite) である。従って、黒雲母の特徴からミステカ・バハ地方で製作され、そこからの交換ルートを通じて入って来たものと考えられる。現在の研究成果で判明していないのはエンゴベ・ナランハ・ディルイド式土器の原産地である。この様な外来土器は日常生活で使用される壺類がほとんどで、ごく少数の浅鉢を除いて、特殊な器形は発掘されていない。しかし、サンタ・クルス・アティサパンで一番大量に出土する壺類が、どの様な目的で遠距離から運ばれなければならないかとは解明されていない。原料やその他の物資を運ぶ容器として使われたという解釈も否定できない。

日常生活で不可欠な黒曜石の原産地は、イダルゴ州のパチュカ、セロ・デ・ナバハス、サクアルティパン、メキシコ州のオトゥンバ、ミチョアカン州のウカレオ／シナペクアロ、プエブラ州のパレドン、ケタロ州のフエンテスエラスなどで、全てトルカ盆地の外にある (Benitez 2006: 82)。最も多量に出土しているのはミチョアカン州のウカレオ／シナペクアロ原産の灰色ないし黒色の黒曜石で、この時代に出土石器の 60% を超える相当量の黒曜石がメキシコ中央高原の西方からレルマ川を下ってトルカに運ばれていた (Benitez 2006; Kabata

2009, 2010)。さらに、チグナワバン湖北に位置するチマリャバン湖のサン・マテオ・アテンコ遺跡でも、出土石器の 80% 以上が黒曜石製である (Jaimes 2011)。これらの事実は、テオティワカンが東方のパチュカ原産の緑色黒曜石とオトゥンバ原産の灰色黒曜石の採掘、流通、配布を管轄し、それが繁栄を支える一要素であったとする解釈の再考を促すものである。少なくともトルカ盆地の事例は従来の解釈と合致しない。また、大都市テオティワカンではウカレオ／シナペクアロ原産の黒曜石の搬入が古典期を通して比較的少ないため、トルカ地域と近隣のウカレオ／シナペクアロ原産地との間で、メソアメリカで数少ない水運レルマ川を利用した黒曜石の直接交換圏が存在していたと考えられる。これは注目すべきことである。一方、宗教、その他の儀式の供物として使われた粘板岩片は、ネバド・デ・トルカの西山麓付近が原産地である可能性がある (Julieta López 私信 2019)。

以上の様に、古典期後期と晩期にサンタ・クルス・アティサパンの人々は、生活必需品の一部をトルカ地域外、特に南はモレロス州、北はミチョアカン州、西は現在のメキシコ州の西側の州境、東はプエブラ州とオアハカ州の州境との、一連の長距離交換網に依存していた。一方、トルカからどのような物資が各地方に送られたかは、周辺地域で十分に考古学調査が実施されていないため、現段階では不明である。

テオティワカンの崩壊後の続古典期に入ると、トルカ盆地は地域的繁栄の第一歩を迎えた。交換ネットワーク圏は拡大せず、逆に地域外との交流網は狭まった。搬入品として土器では唯一、エンゴベ・ナランハ・グルエソ式土器 (厚手オレンジ色土器) と呼ばれるオレンジ系のスリッスを分厚くかけた独特な土器 (主に壺類) が多量に出土している (計 6713 点)。器形も特殊なものではなく、全て日常生活、特に食事に纏わる一連の活動に用いられる壺類である。これらの土器は、料理用具としての使用を目的とするよりは、むしろ特別な原料を運ぶために作られたものである。トルカ盆地の南部から中部、特にモレロス州の続古典期における代表的な都市遺跡ショチカルコで比較的多量に出土している。現在のメキシコ州の南部には先スペイン期から製塩で名の高いトナティコやイスタパン・デ・ラ・サルがあるため、これらの土器は塩の運搬用に使われた可能性も考えられる。

一方、ウカレオ原産の黒曜石の流通量に関しては、古典期前期から晩期にかけて多少増加はするが、大きな違いが認められない。

続古典期を通して、トルカ盆地からどのような物資が流出していたか、その全体像は定かでない。しかし、ウカレオ原産の黒曜石がトルカを通り続古典期に最盛期を迎えたショチカル

コで出土していること(Hirth *et al.* 2006)、コヨラテルコ土器の圏外にあったショチカルコでトルカ独特のコヨラテルコ式三脚付き浅鉢が供物として出土していること、テオテナンゴ遺跡の初期(図19)には、建築様式や石彫の象徴的モチーフにショチカルコの影響が見られること(Piña Chán 1975)から、両地域の間に関係があったことは明らかである。



図19 ショチカルコの影響が見られるピラミッド神殿、テオテナンゴ、続古典期

以上の様に、続古典期に入りトルカ地域外から長距離交換ルートを通して入手された物資の種類は激少する。こうした現象は恐らく続古典期の政治的背景を反映している。テオティワカンの統治下にあった中央高原の各地では、それぞれの地域内での勢力争いに焦点が集中した結果、以前のように広範囲の長距離交換網を利用することが無くなったとも解釈できるのではないと思われる。

## おわりに

メソアメリカ中央高原の考古学は、テオティワカンやテノチティランをはじめとして、歴史上重要であると思われる大遺跡に集中しているのが現状である。こうした長年の傾向は、エリート、神官層と言った社会の頂点の人々の様子を垣間見ているに過ぎない。反面、常に社会の大部分を占める、底辺に置かれた一般住民は歴史から抹殺されてしまっている。小規模の住居址は、20世紀に急激な発展を遂げた工業化、都市化、人口の急増に伴い、日々跡形もなく破壊され、古代の歴史から姿を消してしまっている。結果的に、メソアメリカの考古学が偏った視野からの歴史的解釈に基づく研究となっていることは、憂慮すべきである。トルカ盆地の場合も例外ではない。ルーラル的特徴の強いこの地域は、メキシコ盆地の西に隣接し、穀倉地帯として、またメソアメリカの西部地方からの生活必需品の中継地区として、メキシコ中央高

原の歴史で重要な役割を果たしてきた。それにも関わらず、メソアメリカの考古学研究においてこれまで余り注目されてこなかった。

このトルカ盆地を45年かけ種々異なった視点から続けてきた一連の研究成果の内、本稿ではまず、社会の複雑化過程をセトルメント・パターンの時代的変移を通して考察した。焦点を古典期と続古典期に置き、大国家テオティワカンの影響がこの地域の住民の日常的ルーティンにどのような形で現れているかに言及した。また、トルカ盆地、特にアルト・レルマ湖岸の住民の間にごく最近まで見られた、古来より受け継がれてきた水との深く、かつ独特な関わり合いは、トルカ盆地の歴史的特殊性を理解する為に重要な側面であることを主張した。サンタ・クルス・アティサパンという事例研究を通して、この人と水の生活関係にアプローチした。チグナワパン湖沼に居住地を建造し、自然環境条件が許す限りそこで日々を送っていた湖沼内の住民の生活様式がいかに複雑であったかに焦点を当て、それをジャンニニが提唱したルーティンとトランスグレションという視点から解釈してみた。こうした条件の中で築かれた社会は、物質面のみならず精神面においても周囲の環境の変化に適応すべく、様々な対処策を考案・実行したが、最終的には気候の変化による影響に対応することが出来ず、数世紀続いた人と水の絆で築かれた社会は放棄されるという結果となった。

## 謝辞

トルカ盆地に関する一連の考古学調査は次の援助を受けて実施された。

- a) Universidad Nacional Autónoma de México, UNAM (PAPIIT IN104797); b) National Geographic Society; c) Fundación para el Avance de los Estudios Mesoamericanos, Inc.-FAMSI; d) Consejo Nacional de Ciencia y Tecnología, CONACyT (CONACyT 30696H); e) UNAM (PAPIIT IN403199); f) UNAM (PAPIIT IN401402); g) UNAM (PAPIIT IN402006); h) CONAyT (CONACyT 60260); i) UNAM, (PAPIIT IN400410); j) CONACyT (CONACyT 167268); k) UNAM (PAPIIT IN400515).



## 参考文献

- Aramoni, M. Elena  
1998 *Complejos conceptuales indígenas alrededor del espacio sagrado del Tlalocan: un estudio comparado en México*. Tesis de doctorado, Facultad de Filosofía y Letras, Universidad Nacional Autónoma de México.
- Arce, José Luis, José Luis Macías & L. Vázquez-Selem  
2003 The 10.5 ka Plinian Eruption of Nevado de Toluca Volcano, Mexico: Stratigraphy and Hazard Implications, *Geological Society of America Bulletin* 115(2): 230-248.
- Barba de Piña Chan, Beatriz  
1993 Las cihuapiltin, sublimación de la muerte por parto. In B. Dahlgren (ed.), *III Coloquio de Historia de la religión en Mesoamérica y áreas afines*, pp.31-55. Instituto de Investigaciones Antropológicas, Universidad Nacional Autónoma de México.
- Benitez, Alexander Villa  
2006 *Late Classic and Epiclassic Obsidian Procurement and Consumption in the Southeastern Toluca Valley, Central Highland Mexico*. Ph.D. dissertation, Faculty of the Graduate School, University of Texas, Austin.
- Bourdieu, Pierre  
1977 *Outline of a Theory of Practice*. Cambridge University Press.
- Bray, Warwick  
1968 *Everyday Life of the Aztecs*. B.T. Batsford.
- Buentello, Leonor, Yoko Sugiura & Aída Pérez  
2009 Tras las huellas genéticas de los isleños de Santa Cruz Atizapán. In Y. Sugiura (ed.), *La gente de la ciénaga en tiempos antiguos: La historia de Santa Cruz Atizapán*, pp. 127-144. El Colegio Mexiquense A.C. Universidad Nacional Autónoma de México.
- Caballero, Margarita, Beatriz Ortega, Francisco Valadez, Sarah Metcalfe, José Luis Macías & Yoko Sugiura.  
2002 Sta. Cruz Atizapan: A 22-Ka Lake Level Record and Climatic Implications for the Late Holocene Human Occupation in the Upper Lerma Basin, Central Mexico, *Palaeogeography, Palaeoclimatology, Palaeoecology* 186(3-4): 217-235.
- Chase-Dunn, Christopher & Thomas Hall  
1997 *Rise and Demise: Comparing World-Systems*. Westview Press.  
2000 Comparing World-Systems to Explain Social Evolution. In R. Denemark, J. Friedman, B. Gills & G. Modelski (eds.), *World System History: The Social Science of Long-Term Change*, pp. 85-111. Routledge.
- Crider, Destiny, Deborah L. Nichols, Hector Neff & Michael D Glascock  
2007 In the Aftermath of Teotihuacan: Epiclassic Pottery Production and Distribution in the Teotihuacan Valley, Mexico, *Latin American Antiquity* 18(2): 123-143.
- Dahlgren, Barbro  
1976 Una vida cotidiana. In C. Cook de Leonard (ed.), *Esplendor del México antiguo*, pp. 689-728. Editorial del Valle de México.
- Díaz, Clara Luz  
1998 Ocoyoacac: un sitio con influencia teotihuacana en el valle de Toluca. In R. Brambila & R. Cabrera (eds.), *Los ritmos de cambio en Teotihuacan: reflexiones y discusiones de su cronología*, pp. 353-375. Colección científica número 366. Instituto Nacional de Antropología e Historia.
- Diehl, Richard & Janet Berlo  
1989 *Mesoamerica after the Decline of Teotihuacan A.D: 700-900*. Dumbarton Oaks Research Library and Collection.
- Florentino, Jaqueline  
2015 *Caracterización de las composiciones elemental y físico-química de cerámicas foráneas de los grupos Rosa Granular y Engobe Naranja Diluido del valle de Toluca en el clásico tardío (ca. 450-650*

dC). Tesis de licenciatura en arqueología, Centro Universitario UAEMex Tenancingo, Tenancingo, Estado de México.

García Payón, José

1936 *La zona arqueológica de Tecaxic-Calixtlahuaca y los matlatzincas: etnología y arqueología (primera parte)*. Talleres Gráficas de la Nación.

1979 *La zona arqueológica de Tecaxic-Calixtlahuaca y los matlatzincas (textos de la segunda parte) XXX*. Toluca, Estado de México: Biblioteca Enciclopédica del Estado de México.

García Payón, José, Mario Colín, Wanda Tomassi & Leonardo Manrique

1974 *La zona arqueológica Tecaxic-Calixtlahuaca y los matlatzincas: pt. Etnología y arqueología: Textos 2*. Biblioteca Enciclopédica del Estado de México.

García-Palomo, Armando, José Luis Macías, José Luis Arce, Lucia Capra, Victor Hugo Garduño & Juan Manuel Espíndola

2002 *Geology of Nevado de Toluca Volcano and Surrounding Areas, Central Mexico. Map and Charts Series*, pp. 1-48. Geological Society of America.

García-Palomo, Armando, José Luis Macías & Victor Hugo Garduño

2000 *Miocene to Recent Structural Evolution of the Nevado de Toluca Volcano Region, Central Mexico, Tectonophysics* 318(1-4): 281-302.

Giannini, Humberto

2004 *La "reflexión" cotidiana: Hacia una arqueología de la experiencia*. Editorial Universitaria El saber y la cultura.

Graulich, Michel

1981 *The Metaphor of the Day in Ancient Mexican Myth and Ritual, Current Anthropology* 22(1): 45-60.

Hirth, Kenneth G.

1978 *Problems in Data Recovery and*

*Measurement in Settlement Archaeology, Journal of Field Archaeology* 5(2): 125-131.

Hirth, Kenneth G., Gregory Bondar, Michael D. Glascock, A. J. Vonary & Thierry Daubenspeck

2006 *Supply-Side Economics: An Analysis of Obsidian Procurement and the Organization of Workshop Provisioning*. In K. G. Hirth (ed.), *Obsidian Craft Production in Ancient Central Mexico. Archaeological Research at Xochicalco*, pp. 115-136. University of Utah Press.

Jaimes, Gustavo

2011 *La industria de obsidiana de San Mateo Atenco y su relación con el modo de subsistencia lacustre durante el Clásico y el Epiclásico*. Tesis de licenciatura en arqueología, Universidad Autónoma del Estado de México, Tenancingo, Estado de México.

Jaimes, Gustavo, Yoko Sugiura & Rubén Nieto

2019 *Objetos cerámicos de intercambio antes del ocaso de Teotihuacan Clásico*. In Y. Sugiura, G. Jaimes, C. Pérez & K. Hernández (eds.), *Cerámica y vida cotidiana en la sociedad lacustre del Alto Lerma en el Clásico y Epiclásico (ca. 450-950 d.C.)*, El Colegio Mexiquense A.C.

Jones, Sian

1996 *Discourses of Identity in the Interpretation of the Past*. In P. Graves-Brown, S. Jones & C. Gamble (eds.), *Cultural Identity and Archaeology. The Construction of European Communities*, pp. 62-80. Routledge.

Kabata, Shigeru

2009 *El abastecimiento y la industria de obsidiana en Santa Cruz Atizapán*. In Y. Sugiura (ed.), *La gente de la ciénaga en tiempos antiguos: La historia de Santa Cruz Atizapán*, pp. 243-260. El Colegio Mexiquense A.C. Universidad Nacional Autónoma de México.

2010 *La dinámica regional entre el valle de Toluca y las áreas circundantes: Intercambio antes y después de la caída de Teotihuacan*. Tesis de doctorado en Antropología, Universidad Nacional

Autónoma de México, México.

Kopytoff, Igor

- 1986 The Cultural Biography of Things: Commoditization as Process. In A. Appadurai (ed.), *The Social Life of Things: Commodities in Cultural Perspective*, pp. 64-94. Cambridge University Press.

Lastra, Yolanda

- 1992 *El otomí de Toluca*. México: Instituto de Investigaciones Antropológicas, Universidad Nacional Autónoma de México.

López Austin, Alfredo

- 1990 *Los mitos del Tlacuache: caminos de la mitología mesoamericana*. Alianza Editorial Mexicana.
- 1994 *Tamoanchan y Tlalocan*. Fondo de Cultura Económica.

Lozano, Socorro, Susana Sosa, Margarita Caballero, Beatriz Ortega & Francisco Valadez

- 2009 El paisaje lacustre del valle de Toluca. Su historia y efectos sobre la vida humana. In Y. Sugiura (ed.), *La gente de la ciénaga en tiempos antiguos: La historia de Santa Cruz Atizapán*, pp. 43-61. El Colegio Mexiquense A.C. Universidad Nacional Autónoma de México.

Lozano, Socorro, Susana Sosa, Yoko Sugiura & Margarita Caballero

- 2005 23,000 yr of Vegetation History of the Upper Lerma Basin, a Tropical High-Altitude Basin in Central Mexico, *Quaternary Research* 64(1): 70-82.

Macías, José Luis, P.A. García, José Luis Arce, C. Siebe, J.M. Espíndola, J.C. Komorowski & K. Scott

- 1997 Late Pleistocene-Holocene Cataclysmic Eruptions at Nevado de Toluca and Jocotitlan Volcanoes, Central Mexico, *Brigham Young University Geology Studies* 42(1): 493-528.

Manzanilla, Linda

- 2003 El proceso de abandono de Teotihuacan y su reocupación por grupos epiclásicos, *TRACE* 43: 70-76.

Martínez, Diana

- 2007 *Subsistencia mixta en el Montículo 20b, La Campana-Santa Cruz Atizapán, Estado de México*. Tesis de maestría en antropología, Universidad Nacional Autónoma de México, México.

Martínez, Diana & Emily McClung

- 2009 Las plantas como recurso en Santa Cruz Atizapán. In Y. Sugiura (ed.), *La gente de la ciénaga en tiempos antiguos: La historia de Santa Cruz Atizapán*, pp. 175-194. El Colegio Mexiquense A.C. Universidad Nacional Autónoma de México.

Morales Ríos, Mónica Silvy

- 2017 *Evaluación biocultural: el proceso salud-enfermedad, las huellas de actividad física y las prácticas funerarias, en San Mateo Atenco y Santa Cruz Atizapán, periodo Epiclásico (650/700 a 900 D.C.)*. Tesis de maestría en antropología, Universidad Nacional Autónoma de México, México.

Muñoz, María de Lourdes, Minerva Janini Mejía-Rangel, Miguel Moreno & Yoko Sugiura

- 2014 Purificación, ampliación y análisis filogenético de secuencias de DNA mitocondrial de los pobladores del valle de Toluca. Paper presented at the XXX Mesa Redonda de la Sociedad Mexicana de Antropología "El bajío y sus regiones vecinas. Acercamientos históricos y antropológicos", México.

Nichols, Deborah L., Elizabeth M. Brumfiel, Hector Neff, Mary Hodge, Thomas H. Charlton & Michael D. Glascock

- 2002 Neutrons, Markets, Cities, and Empires: A 1000-Year Perspective on Ceramic Production and Distribution in the Postclassic Basin of Mexico, *Journal of Anthropological Archaeology* 21(1): 25-82.

Nuñez, Elide

- 2019 *Análisis formal y estilístico de los braseros de Santa Cruz Atizapán. Continuidad, innovación y cambio del Clásico tardío al Epiclásico*. Tesis de maestría en antropología, Posgrado en Antropología, Facultad de Filosofía y Letras, Universidad Nacional Autónoma



- de México, México.
- Obregón, Mauricio, Rocío Hernández & Luis Barba  
2019 Análisis de residuos químicos de las ollas, cazuelas, comales y cajetes de factura local y su interpretación. In Y. Sugiura, M. d. C. Pérez, G. Jaimes & K. Hernández (eds.), *Cerámica y vida cotidiana en la sociedad lacustre del Alto Lerma en el Clásico y el Epiclásico*. El Colegio Mexiquense A.C.
- Pérez, Ma del Carmen  
2002 *Determinación de la función de la cerámica arqueológica en el sitio de Santa Cruz Atizapán, Estado de México por medio del análisis químico*. Tesis de licenciatura en arqueología, Escuela Nacional de Antropología e Historia, México.  
2009 Análisis químicos para identificar la función de la cerámica en Santa Cruz Atizapán. In Y. Sugiura (ed.), *La gente de la ciénaga en tiempos antiguos: La historia de Santa Cruz Atizapán*, pp. 231-242. El Colegio Mexiquense A.C. Universidad Nacional Autónoma de México.  
2011 *Reflexiones en torno al estilo decorativo Coyotlatelco: el caso de la cerámica de Santa Cruz Atizapán*. Tesis de maestría en estudios mesoamericanos, Universidad Nacional Autónoma de México.  
2017 *La cerámica Coyotlatelco en el valle de Toluca: un análisis morfo-funcional y estilístico*. Tesis de doctorado en estudios mesoamericanos, Universidad Nacional Autónoma de México.
- Pérez, Ma del Carmen, Kenia Hernández & Mauricio Obregón  
en proceso Aproximación al uso cotidiano de recipientes cerámicos a partir del estudio sistemático de residuos químicos, Santa Cruz Atizapán en el valle de Toluca. In Y. Sugiura, R. Nieto & G. Jaimes (eds.), *Cerámica y vida cotidiana II. Estudios arqueométricos de la cerámica de Santa Cruz Atizapán*, El Colegio Mexiquense A.C.
- Piña Chán, Román  
1967 Un complejo Coyotlatelco en Coyoacán, México, D.F., *Anales de Antropología* 4(1): 141-160.
- 1975 *Teotenango, el antiguo lugar de la muralla. Memoria de las excavaciones arqueológicas*. 2 vols. Gobierno del Estado de México, Dirección de Turismo.
- Quezada, Noemí  
1972 *Los matlatzincas: Época prehispánica y época colonial hasta 1650*. Departamento de Investigaciones Históricas-Instituto Nacional de Antropología e Historia.  
1977 Creencias tradicionales sobre embarazo y parto, *Anales de Antropología* 14(1): 307-326.
- Rattray, Evelyn  
1966 An Archeological and Stylistic Study of Coyotlatelco Pottery, *Mesoamerican Notes* 7-8: 87-211.
- Rodríguez de Shadow, María  
2000 *La mujer azteca*. Colección Historia 6. Universidad Autónoma del Estado de México.
- Sahagún, Fray Bernardino De  
2000 *Historia general de las cosas de la Nueva España*. Consejo Nacional para la Cultura y las Artes.
- Sanders, William T.  
1956 The Central Mexican Symbiotic Region: A Study in Prehistoric Settlement Patterns. In G. Willey (ed.), *Prehistoric Settlement Patterns in the New World* (Viking Fund Publications in Anthropology, vol. 23) , pp. 115-127. Wenner-Gren Foundation for Anthropological Research.
- Sanders, William T., Jeffrey R. Parsons & Robert S. Santley  
1979 *The Basin of Mexico: The Cultural Ecology of a Civilization*. Academic Press.
- Schiffer, Michael B.  
1972 Archaeological Context and Systemic Context, *American Antiquity* 37(2): 156-165.
- Schumann, Otto  
1975 Notas sobre la lengua ocuilteca y

- sus relaciones. In R. Piña Chan (ed.), *Teotlanango: el antiguo lugar de la muralla. Memorias de las excavaciones arqueológicas*, pp. 528-539. Dirección de Turismo, Gobierno del Estado de México.
- Silis, Omar
- 2005 *El ritual lacustre en los islotes artificiales de la ciénaga de Chignahuapan, Santa Cruz Atizapán, Estado de México*. Tesis de licenciatura en arqueología, Escuela Nacional de Antropología e Historia, México.
- Smith, Michael E.
- 2011 Calixtlahuaca. In Y. Sugiura (ed.), *Historia General Ilustrada del Estado de México*, vol. 1. Biblioteca Mexiquense del Bicentenario Toluca.
- 2015 Calixtlahuaca: capital del antiguo Matlatzinco. In F. Guerrero & A. L. Elías (eds.), *El patrimonio arqueológico de Toluca: herencia milenaria*, pp. 87-104. Colección Identidad/Historia. Fondo Editorial Estado de México.
- 2017 Aztec Urbanism: Cities and Towns. In D. Nichols & E. Rodríguez-Alegría (eds.), *The Oxford Handbook of the Aztecs*, pp. 201-218. Oxford University Press.
- Solar, Laura
- 2006 El fenómeno Coyotlatelco en el centro de México: consideraciones en torno a un debate académico. In L. Solar (ed.), *El fenómeno Coyotlatelco en el centro de México: tiempo, espacio y significado. Memoria del primer seminario-taller sobre problemáticas regionales*, pp. 1-16. Consejo Nacional para la Cultura y las Artes. Instituto Nacional de Antropología e Historia.
- Soustelle, Jacques
- 1961 *Daily Life of the Aztecs*. Weindfeld & Nicolson.
- 1996 *El universo de los aztecas*. Fondo de Cultura Económica.
- Stoner, Wesley
- 2015 *Provenance Investigation for Uncommon Ceramics Found in the Toluca Valley*. Archaeometry Laboratory Research Reactor Centre. University of Missouri.
- Stoner, Wesley & Michael D. Glascock
- 2013 *Neutron Activation Analysis of Coyotlatelco Ceramics from the Toluca Valley and the Basin of Mexico*. Archaeometry Laboratory Research Reactor Centre. University of Missouri.
- 2014 *Neutron Activation Analysis of Coyotlatelco Ceramics from the Toluca Valley and the Basin of Mexico. Addendum to 2013*. Archaeometry Laboratory Research Reactor Centre. University of Missouri.
- Stoner, Wesley, Yoko Sugiura & Ma del Carmen Pérez
- 2014 Uniformidad regional y multilocalidad en la producción del Coyotlatelco: el caso del valle de Toluca. Paper presented at the VIII Coloquio Bosch-Gimpera "Relaciones entre las diferentes áreas de Mesoamérica con énfasis en las relaciones con Teotihuacan, México.
- Sugiura, Yoko
- 1975 Ceramic relationship between Ojo de Agua, State of Mexico, and Teotihuacan. Paper presented at the SAA Meeting, San Louis, Missouri.
- 1977 *Proyecto arqueológico Valle de Toluca*. Archivo Técnico del Departamento de Monumentos Prehispánicos del Instituto Nacional de Antropología e Historia.
- 1981 *Informe de la segunda temporada de campo del Proyecto Arqueológico valle de Toluca*. Consejo Nacional de Arqueología, Instituto Nacional de Antropología e Historia.
- 1996 La tecnología de lo cotidiano. In S. Lombardo & E. Nalda (eds.), *Temas mesoamericanos*, Instituto Nacional de Antropología e Historia/Consejo Nacional para la Cultura y las Artes.
- 1997 *Proyecto Arqueológico de Santa Cruz Atizapán*. Consejo de Arqueología del Instituto Nacional de Antropología e Historia.
- 2005 *Y atrás quedó la ciudad de los Dioses: Historia de los asentamientos en el valle de Toluca*. Universidad Nacional Autónoma de México.



- 2006 ¿Continuidad o discontinuidad entre la cerámica teotihuacana y el Coyotlatelco?: una reflexión desde el valle de Toluca. In L. Solar (ed.), *El fenómeno Coyotlatelco en el Centro de México: tiempo, espacio y significado: Memoria del primer seminario-taller sobre problemas regionales*, pp. 127-162. Consejo Nacional de Cultura y Artes. Instituto Nacional de Antropología e Historia.
- 2013 Reflexiones en torno a los problemas del Epiclásico y el Coyotlatelco. In C. Pomédio, G. Pereira & E. Fernández-Villanueva (eds.), *Tradiciones cerámicas del Epiclásico en el Bajío y regiones aledañas* (BAR International Series 2519), pp. 105-114. BAR.
- Sugiura, Yoko & Gustavo Jaimes  
2019 Grupo Pseudoanaranjado delgado: ¿una imitación del Anaranjado delgado, cerámica emblemática de Teotihuacan? In Y. Sugiura, G. Jaimes, C. Pérez & K. Hernández (eds.), *Cerámica y vida cotidiana en la sociedad lacustre del Alto Lerma en el Clásico y Epiclásico (ca. 450-950 d.C.)*, El Colegio Mexiquense A.C.
- Sugiura, Yoko, Gustavo Jaimes, Carmen Pérez & Kenia Hernández  
2019 *Cerámica y vida cotidiana en la sociedad lacustre del Alto Lerma en el Clásico y el Epiclásico (cerca 500-950 dC)*. El Colegio Mexiquense A.C.
- Sugiura, Yoko & Omar Silis  
2009 Figurillas, adornos de braseros, pesas de red y su significado en el ritual lacustre de Santa Cruz Atizapán. In Y. Sugiura (ed.), *La gente de la ciénaga en tiempos antiguos: La historia de Santa Cruz Atizapán*, pp. 261-284. El Colegio Mexiquense A.C. Universidad Nacional Autónoma de México.
- Sugiura, Yoko, Liliana Torres, Mariana Covarrubias & Mauro de Ángeles  
2003 La muerte de una joven en parto y su significado en la vida lacustre: El entierro 5 en el islote 20, la Ciénaga de Chignahuapan, Estado de México, *Anales de Antropología* 37(1): 39-69.
- Sugiura, Yoko, César Villalobos, Ma del Carmen Pérez & Elizabeth Zepeda  
2015 Una mirada hacia el proceso de identidad en el valle de Toluca precortesiano, México, *Revista de Indias* 75(264): 289-322.
- Sugiura, Yoko, César Villalobos & Elizabeth Zepeda  
2013 Biografía cultural de la cerámica arqueológica desde la perspectiva de la materialidad: el caso del valle de Toluca, *Anales de Antropología* 47(2): 63-90.
- Terreros, Martín  
2013 *Una aproximación a la alimentación por medio del análisis de residuos químicos y FRX de comales provenientes de un sitio lacustre, Santa Cruz Atizapán (550-900 d.c.)*. Tesis de licenciatura en arqueología, Escuela Nacional de Antropología e Historia, México.
- Torres, Liliana  
2004 *Informe final del análisis osteológico de los restos óseos humanos del Proyecto Santa Cruz Atizapán, Estado de México (temporadas 79, 97, 2000 y 2001)*. Documento interno del Proyecto Arqueológico de Santa Cruz Atizapán. México: Instituto de Investigaciones Antropológicas de la Universidad Nacional Autónoma de México.
- Tozzer, Alfred M.  
1921 *Excavation of a Site at Santiago Ahuizotla, D.F. Mexico*. Bureau of American Ethnology, Bulletin, 74. Smithsonian Institution.
- Valadez, Raúl & Bernardo Rodríguez  
2009 Los restos zoológicos de Santa Cruz Atizapán. In Y. Sugiura (ed.), *La gente de la ciénaga en tiempos antiguos: La historia de Santa Cruz Atizapán*, pp. 195-229. El Colegio Mexiquense A.C. Universidad Nacional Autónoma de México.
- Vargas, Luis Alberto & Eduardo Matos  
1973 El embarazo y el parto en el México prehispánico, *Anales de Antropología* 10: 297-310.

Velázquez, Seidy Guadalupe

- 2015 *Una aproximación al estado nutricional de la población prehispánica de San Mateo Atenco y Santa Cruz Atizapán, durante el Clásico tardío y Epiclásico: análisis de restos óseos por FRX*. Tesis de licenciatura en arqueología, Centro Universitario Tenancingo, Universidad Autónoma del Estado de México, Tenancingo, Estado de México.

Vergara, Nelson

- 2011 *Cotidianidad y significación: aproximaciones al tema de la memoria desde el pensamiento de Humberto Giannini, Desenvolvimento e Meio Ambiente* 23: 59-66.

Viesca, Carlos

- 1984 *Prevención y terapéuticas mexicas*. In F. Martínez Cortés (ed.), *Historia general de la medicina en México. Tomo I México antiguo*, pp. 201-216. Universidad Nacional Autónoma de México.

Wallerstein, Immanuel

- 1979 *El moderno sistema mundial I: La agricultura capitalista y los orígenes de la economía-mundo europea en el siglo XVI*. Siglo Veintiuno.

Wright, David Charles

- 2005a *Lengua, cultura e historia de los otomíes, Arqueología Mexicana* 73: 26-29.
- 2005b *Los otomíes: cultura, lengua y escritura. Volumen 1: texto*. Tesis de doctorado en ciencias sociales, El Colegio de Michoacán, Zamora, Michoacán.



# Human Groups and Waterscapes in Ancient Society: Archaeology of the Valley of Toluca, Central Mexico

Yoko SUGIURA\*

The Valley of Toluca is located to the west of the Basin of Mexico, where the capital of Mexico is situated. The history of this high-altitude basin goes back more than 3000 years. The valley has, also, been known for the presence of the three shallow water ecosystems located in the eastern portion of the valley.

Throughout their history, human groups settled in the valley have strong relationships with their surrounding lacustrine environment which constitutes deep rooted identity of the people of Toluca Valley. During the second half of the Classic period, ancient people colonized these shallow water ecosystems. The lacustrine culture flourished during the Epiclassic period, but towards the end of the same period the changes on environmental conditions, provoked by the increase of water levels, forced them to abandon their lacustrine settlements.

Archaeological materials show that these people received strong cultural influences of the adjacent Basin of Mexico, particularly of Teotihuacan. Based on the materials recovered from the excavations at Santa Cruz Atizapan, the article focuses on the ancient people who lived on man-made islet, from the perspective of the quotidian life, proposed by Giannini. It discusses how they lived their daily life in the marshland, highlighting its particular lifestyle and its complexity. These aspects are crucial for understanding the course of the history of Toluca Valley.

## **Keywords:**

Central Highland of Mexico, Valley of Toluca, Classic period, Epiclassic period, Teotihuacan legacy, lacustrine mode of life.

\* El Colegio Mexiquense